（第一部）男根崇拜史

＝リンガムに關する一般的考察＝

一、性の神格化

大英百科辭典の『キリスト教』の條りに、次の様な一節が書かれてある。

『キリスト教以外の凡ゆる宗教は、其根本を洗つて見るならば、何等かの形式をもつた自然崇拜教と云ふことが出來る。而して夫等の異教に於て、最も深く最も強く畏怖心を刺戟する自然作用は、實に生殖作用なのである。『生れること』そして『育つこと』――此の不可思議は自然作用中最も深奥な神祕である。此神祕は凡ての思慮深い異教徒を包み、さまざまの形で表現されてゐる。或るものは稍々清淨なる形式で、又或るものは稍々卑猥なる形式で。』

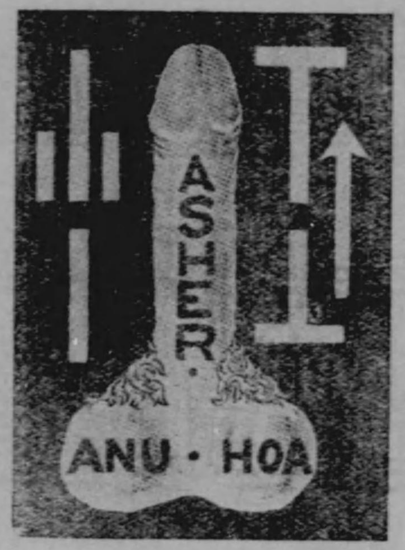
第一圖

「宗教的感情の起原」獨逸カウフマンの作畫

『邪教を奉じた古代の思想家たちは、今日の科學者と同樣、宇宙の起源と保全との隱れた祕密を發く鍵は、實に『性の神祕』の中に祕んでゐるものと信じてゐたのである。

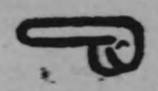
『二つのエネルギーと云はうか、又は二つの原動力と云はうか、兎に角能動的な或る力（男性）と受動的な他の力（女性）とは、常に或物（又は者）を創造する目的を以て結合されるのであると考へられてゐた。そして天と地太陽と月、晝と夜は生物の創造の爲めに常に共力して働きかけてゐるものであると信ぜられてゐた。古代文明を飾る多くの多神教的崇

第二圖



男根とそのシムボル

第三圖

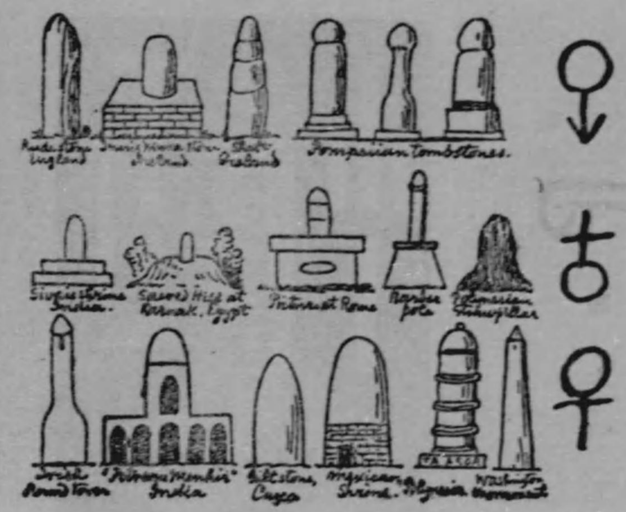


上

拜の殆ど總ては、斯くの如き基礎の上に立つたものであつて、現象となつて現はれる多くの自然力は、いづれも男女の性を與へられて神格化されたのである。そして人間のもつ諸機能の理想化されたもの、卽ち多くの欲望や肉慾と云ふやうなものが、崇拜の目的物として神格を附與せられ人間自らの意志の中に祕む本能は、轉て神格的權化として祀られるに至つたのである。

『で我々が今日、如何なる多神教を調べて見ても性の神格化されてゐないも

第四圖



塔、柱、墓石、矢等

のは一つもないことを容易に發見し得るのである。古代宗教にして、何等かの儀式によつて、性的行爲を神に奉獻せぬものは一つも無かつたと云つてよいのである。然し乍ら、此處に注意すべきことは、彼等は其の神前汚瀆を快樂の爲めに行つたのではなくして、全く嚴肅な宗教的動業として行つたと云ふ點である……」

それから文章は更に續いて、此等のことがキリスト教に於ては如何に相違してゐるかと云ふことを說いてゐる。

如何なる宗教に於ても結局は「或る力」

第七圖

アッシリヤのアッシュール神。右手に持てるはリンガムのシムボルである松毬。

第五圖

同上

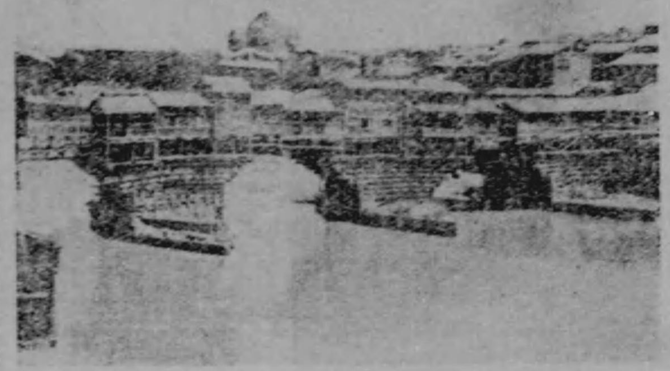
第六圖

同上

の信仰である。一神教に於ては一つの力を信じ、多神教に於ては多くの力を信ずる。而もその「力」は、我々人間以外のもので、我々よりも強きことは恰も古き希臘教の聖書に記るされてゐるヘシオドの神話中に見える「鷹の爪の中に捕まれた鶯」の如くに、人間の全く抵抗し難い偉大なる「力」なのである。

原始時代の人々は「神聖な力」を數多くの形式で認め、乃で多神教が生れて來た。處で此「神聖な力」が、たと

第八圖

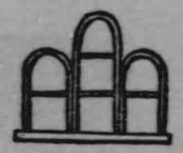


印度カシミール溪谷の首都スリナガルの寺院の堂宇

へどの樣な形式で表はされようとも、その力は常に、凡ての自然界を創造した處の『陰陽の力』に對する崇拜の形を採つてゐることは見逃し難い事實である。殆ど凡ての宗教は、一樣に『汝の神を崇めよ』と教へる。さればこそ、アーリヤンの血統を引いた凡ての國民が、創造主を呼ぶに『父よ』とか『我等の父よ』とか或は又『天にまします吾等の父よ』と云ふ風に父稱（男性）を以てするのも故あるではないか。

アーリヤン民族に於ける最も原始的な考

第九圖



印度カシミール溪谷の首都スリナガルの寺院の堂宇。

第十圖

病魔除けとして用ゐられたメダル。第四の黑人像は不姙の治療の呪として用ゐられたパン神のリンガムを現した像。

へ方は『ウラヌス（天）は沖空にかゝり、ガヱヤ（地）は之を支へて、共に〳〵永遠の性的抱擁を續けてゐる。森羅萬象は悉く此抱擁より創造せられるのである』と云ふのであつたが、希臘人や羅馬人も之と全く同じ考へ方をしてゐる。

或は又『神の精靈は海洋を抱溫めて地を產んだそして凡てのものは其地の中にある』と云ふ考へ方もあつたが、之は古代の猶太人の考へ方だつた。此場合は恐らく只一人の男性の神のみが『生殖』（創造）を行つたといふ意味らしく思はれ、海洋を女性に見立てた神話

第十一圖

パーカイ神、運命の神。チユーマンの作。

第十二圖

神

同上

であると云ふ見方は後世の哲學的解說であると思はれる。

嵐や瀧なす豪雨、激流などに見られる力、滅茶苦茶な暴力と云ふものは人間と動物との恐怖心をいたく刺戟する電光の閃き、雷鳴の轟き、颱風の唸りなどは、いづれも人の心を極度に戰かせ、そして此等の現象の原動力と思はれる處の或る『力』の前には如何に人間の力が弱少で見るかげもないものであるかと云ふことを、古代の人々はまさ〳〵と認めたに相違ないのである。

第十三圖

第七世紀の頃サレルノで發明された三位一體像

古代の人々が解釋出來ず、又造り出すことも出來ず又意のまゝに操ることも、防ぎ止めることも出來なかつた處の自然界に於ける凡ての現象について、古代の人々はその力を『神』と呼び、次のやうに歌つてゐる——

風の囁く聲は誰の聲か、
高い山の面輪に浮ぶ無限の意味——
その言葉はわたしには解らない。
その背後にはきつと誰かゞゐる。
「それが卽ち神なんだ！」

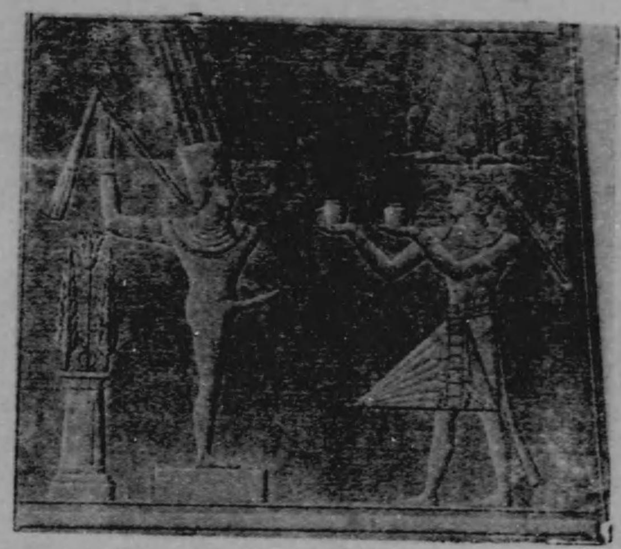
第十四圖

パン神に對する奉獻

凡ての宗教に於て、最も深く畏怖心を刺戟する自然現象、それは卽ち生殖である聖ポーロでさへも『男は……その妻と寢ぬべきもの、夫婦は一心同體である。これぞこれ絶大の不可思議』と云つてゐるではないか。

自然界は生誕の神祕、生神の起源以上の神祕は藏してゐなかつた。そして此最も深遠なる自然界の謎は、古い昔から、哲學者の思慮と注意とを喚起したのである。私は此謎が彼等古代人の心に如何に重大なものであつたかと云ふこと、それから、又此神祕を闡明する爲めに彼等が如何なる理論に

第十五圖

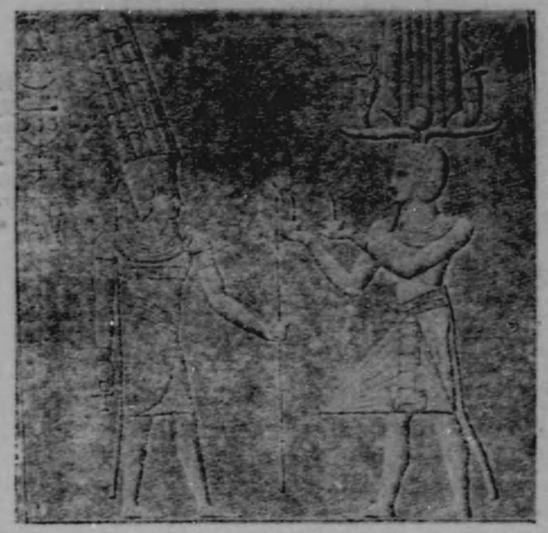


セナ神に對するネネフタの奉獻、寓實的なもの。

到達したかと云ふことを述べる爲めに古代人のことを繰返し述べた積りである。

兎にも角にも人間が考へ事をするやうになつてから、何時の時代に於ても、人間の心を最も煩はした問題は、『自分は何處から什うして生れ、そして什ういふわけで生きてゐるのか』と云ふことである。然り而して『生れて來たこと、生きてゐること』の幸福を意識的に禮讚し、喜ぶ以上、その人は『創造主』に對して感謝の念を抱くのは當然のことである。そして此感謝は今日まで、凡ての宗教の根本

第十六圖



第十五圖と同じ、（但しシムボリカルなもの。）

となつてゐるのである。凡てのキリスト教的文學は「汝の創造主を崇めよ」と云ふ命令に滿ちてゐる。

創造者の性質に關する人間の解釋は、その後だん〳〵變つて來た。神の觀念の啓示の樣式について、些し許りの觀察を我々にさせるのである。凡ゆる宗教を檢討すれば、我々は、我々に對して「生」を與へた力への、同じ樣な感謝を見出すのである。たとへ如何なる形の宗教と雖も、性を神格化せぬものはないと云ふことを我々は知ることが出來るのである。

第十七圖

ゴシックの男性の三角形。

Fig. 215.—A Gothic male triangle.

二、リンガムが「權力」のシムボルとなつた由來

先づ我々は、幾千萬年の古代と雖も男性が女性に交合することなくして、子供が生れることは絶對になかつたと云ふことを劈頭に牢記して置くことゝしやう。新らしい生命を生み出す爲めに、如何に男性が絶對的の地位を占めてゐたかと云ふことは、アナクサゴラス（西暦紀元前四五〇年代の人）の書き殘した原理を見ればわかる。彼の說

第十八圖

驢けゐ鼓に現じしモーセに語る神。

によれば『胎兒はその父なる男の種子から生育するものであつて、母なる女は、唯單にその種子の生長する場所を提供する丈である。恰も木の種子が地に下ろされて生育する樣に。』と云ふのである此說は『腹は借り物』など、言つてゐる一部の人によつて今日でも信ぜられてゐる位であつて、『彼奴はあの女に子供を生ませた』と云ふやうな言ひ方も亦、この說から起つたものと思はれる。

舊約聖書創世紀第三十章第一節に、『ラケル女はおのれがヤコブ（その夫）の子を生まざるを顧みて、……夫ヤコブに言ひけるは、我に子を與へよ然らずんば我死せん』とあるのも亦、これと同樣である。

第十九圖

クルフユーエルステン・ビベルの巻頭の頁

（註、妻ラケルが自分の孕まないのは偏に夫ヤコブが子だねを自分に呉れないからだと信じてゐたのである。）

古來多くの種族に於ては、男性は、その生理的の力を以て、女や子供等を征服した。その爲に女や子供たちは、恰も其家の守り神に對すると同樣、寧ろ恐怖をさへもつて男を崇拜した。そしてかなり文明開化に浴した種族の間に於ても、男性は其家の女、子供、及び奴隷に對して自由と生命との絕對權力を持つてゐたのである。

第二十圖

ネボ山上に於て、モーセに現はれた神。

ハーバート・スペンサーは祖先崇拜と云ふことは最初の、そして最も原始的な宗教であると語つてゐる。

男性の最も主要な特異性、即ち男性の生殖器（リンガム）は、この様な關係からして、轉て『權力』のシムボルとして用ひられる様になり、更に『父、即ち家族の創造主としての權力』のシムボルとせられ、進んでは大造物主のシムボルとして用ひられるやうになつたのである。

希臘人の間に於ては男性の生殖器、即ち陰莖（いんけい）と二つの睾丸はフアルスと呼ばれた。今日我々が性崇拜のことを一と口にフアリツク、ウォアシツプ（男根崇拜）と呼ぶのは、その語源を玆に有するのである。

第二十一圖

神と背光。及びマツシユー、マコ、ルカ、ジヨン等の諸聖。及びアダナス・ダイ

三、開くもの

古代のフォエニツシヤンの間では、はアツシヤーと呼ばれてゐた。この言葉は『直立せるもの、力强きもの、開くもの』の意であつた。（第二圖參照）開くものと云ふ義は、爲す場合に、ことから發した

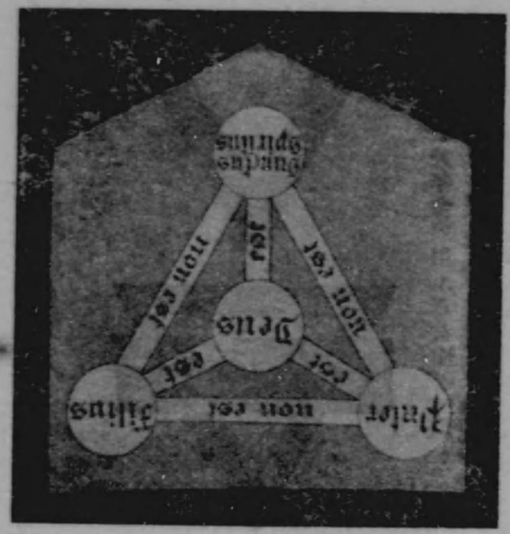
第二十二圖

近代の彫像の輪、三角形の背光を帶べる神。

言葉である。フイローはフォエニツシヤンの諸神について語つてゐるが、その一つに「開くものクライゾール」に關する話がある。彼は亦埃及の同じ樣な神「プター神」のことも語つてゐるが、要するに、この「開くもの」の意味は最初に處女を孕ましたもの、最初に

て「　への門を開くもの」、最初に道を開くものとの義に外ならぬ。事實この「プタア神」は「バアル神」と同じ神樣であると考へられてゐたのである。「バアル神」と云ふのは「水揚げの神」「

第二十三圖



三位一體。中世紀に創案され、今日も用ゐらる。

神」「　の神」として知られてゐる有名な男像の神である。

同じ樣な考へは古代のイスラエル人の間に於ても盛んに行はれた。聖書は「開くもの」としてのエホバについて次の樣に語つてゐる（創生紀第三十章第二十二節）

「……而して神はラチエルを知り給へり而して神は彼女の語るを聞き給へり。而して神は彼女の　開き給ひぬ……」

又創生紀第十九章第三十一節には

「……而して神はレーアの嫁はるゝを見

第二十四圖

上は基督教青年會の用ふる女性の三角形。
下は基督教女子青年會の用ふる女性三角。

給ひて、「開かれたり云々」とある。

四、宣誓の起源

神に對する宣誓は、或は神に祈願することによつても爲されたが、古代に於ては、神聖なもの（卽ち生殖器）を神像に觸れることによつて爲さるゝことが多かつた。古代の猶太人の間では宣誓をする場合には、宣誓の相手となるものゝ　の上に手を載せたと云ふことが傳へられてゐる。

第二十五圖

「拒絕された愛」矢はリンガムのシムボル。

聖書を見ると上記の外にかなり猛烈な記述が隨所にある。最初飜譯に當つた人々は、神の御言葉の餘りに露骨なのに驚かざるを得なかつた。殊に古代の原書に於ては其等露骨な言葉が滅茶苦茶に多かつたので、飜譯者たちは神を誹謗せんと企てた程であつた。然し彼等は躰て譯文の語法を變へることに氣がつき、ヘブライ語の『陰莖』に相當する諸文字を悉く英語のロイン（腰）に相當する文字に改めた。

聖書に觸れたり接吻したりすること

第二十六圖

ニロスの像、トルワルドセンの作。

（特に宣誓する場合に）は全く同じ考へから出發したものであつて、「要するに神聖なるものに觸れる」と云ふ意味なのである。そして我々が今日、敬意を表する場合に單に右手を擧げることも亦同じ樣な考への遺物に外ならぬのである。右手を擧げることは、自分の語る處の眞實であることを證する爲めに神に對して訴へることを意味するのである。乃で宣誓と云ふものは、最初はアッシヤー卽ちバアル神に對する一つの證明として行はれたものであると云ふことが言ひ得るのであ

第二十七圖

印度の愛の神。

る。

五、リンガム崇拜

聖書が我々に語つてゐる處によれば、此神は古代のイスラエル人中の異教徒によつて、「バアル神」「主」「バアルペオール」　等と云ふ名稱で呼ばれてゐたものである。ヒンドウース人の間では陰莖は「リンガム」と呼ばれてゐる。そして今日に於ても亞細亞の三億以上の民族は、創造主の偶像として此「リンガム」を崇拜してゐるのである。

第二十八圖

デイオニソ神の棹に戯れてゐる牧羊神フアウンと水の女神ニンフ。

埃及の古代寺院の廢墟には、此樣な像が全く寫實的に表現されて殘つてゐるものが尠くない。埃及の古代寺院の彫刻に於ては殊に多い樣である。此樣な像を崇拜する風習は轉て埃及から希臘に這入つた。又男根崇拜の風習はアスデツテ寺院の廢墟に於ても今日發見されてゐる。

六、リンガム表現の種々相

（其一）

埃及人の間では此リンガムの像は象形文字として用ひられ、「男性」又は「父」と云ふ眞味をあらはしてゐる。又第一圖

第二十九圖

デオニソス神の棹に戯むれる少女。

に示す樣な形も多く象形文字として使用せられ「直面する」、「直前」又は「生殖」「男性」等の意味に用ひられた。

更にリンガムは象徴的に「柱形」として表現された。而もその柱形は、丁度睾丸に相當するやうに根元の兩側に二つの柱石をもつてゐた。（今日我々が睾丸のことを「柱石」と俗稱するのは此處に起源を有する。聖書の利未記第二十一章第二十節にも「柱石」と呼んでゐる文句がある。

このしるしは又Tの字を逆しまにした

第三十二圖

アーモアとベツカンテ。レツシンゲの作

様な柱形としても表現された。又この本尊が多くの參拜者によつて取りかこまれた時には、遠くから見ることが出來ぬので、Tと云ふ文字其儘の丁字形十字架の形で表現されたものもあつた。

原始人が人間の身體の如何なる器官を崇拜の目的物として用ひたとて、それは前に述べた多くの異教徒の場合と同樣に決して不眞面目な動機からでは毛頭なかつたと云ふことを忘れてはならない。

神が素裸のアダムとイヴとを創り給ふたとて、決して羞恥の意義を豫期して素

第三十一圖

聖アントニーの誘惑。

裸にしたわけではないのである。性のことに關する羞恥の觀念と云ふものは、原始時代に於ては自然的には存してゐなかつたものと思はれるのである。

創造の力のシムボルとして生殖器（男性の）を用ひたことは極めて自然なことであつて、何等色情的の意味は無かつたのである。是等のシムボルを用ひたのは唯宗教的拜跪の爲めのみであつたが只一つの例外は墓場に用ひたことである。寺院、墓標、墓石などには是等の神聖なる形が彫まれたが是は何人と雖も、如何な

第三十二圖

聖アントニーの誘惑。フォン・レーテンの作

第三十三圖

聖アントニーの誘惑。フォン・レーテンの作。

る汚濁をも是等のものに加へては成らないと云ふことを意味したのである。

處でドルメンやドルメン類似の柱石は世界中至る處に發見されるが、此等のものは古代の猶太人の場合と同樣、多くは何等の彫刻をも彫んでゐないのである。これは何故かと云ふに、出埃及紀第二十一章第二十五節に

『汝等若し我を石に彫まんとするなれば切石を用ふる勿れ、汝若し切石の上に石鎚を振ふ時は、汝はその切石を汚すものなり』とある樣に、祭壇を造る場合切石

第三十四圖

フラ・アンヂエリコとマコとに伴はれたフレスコ

を使用することが堅く禁じられてゐた爲めであると思はれる。

然し乍ら他の民族に於ては、石は往々にして切られ、全く男根の形そのまゝに刻まれたものもあつた。

今日我々の一般に用ひてゐる墓石は上述の如き柱石から發達し來つたものであるが、男根の形を其儘に取らずに直立してゐる碑石の、部分丈け陰莖に象つたのである。普通其處此處に散見する塔や、種々の形をした尖塔なども男根の形から來たものであつて、此多

くは原始的な男根柱石の直立した形を無意識に眞似たものと信ずべき理由がある。

セントルイスにある聖ヴインセント寺院の塔は最初は極めて寫實的な男根形をしてゐたのであるが、千八百九十六年の旋風で其塔が倒れてからは凡ての尖塔の原始的動機を露骨に暗示するやうな部分の悉く除かれた今日の新塔が築かれた。世界の何處を見渡しても、男根を暗示する柱石や塔の一つ位ない處は無いのである。（第四圖參照）

男根の表現方法として矢を用ひる場合もある。此場合は二つの矢尻が睾丸をあらはすのである。

七、睾丸の職能の原始的解釋

一體人間が神を創造し、また思念する場合に、神の像を何に象つたかと云ふに、人間自身の形に象つたのである。陰莖は『アッシャー』即ち『力强きもの』『開くもの』であつて右側の睾丸は『アミ』又は『オン』と呼ばれ男性の子孫を創り出だす處の權威者であると

想像され、左側の睾丸は『ホア』と呼ばれて女性の子孫を生み出だすものと想像されてゐた。

多くの記錄者は右側の睾丸が男性を創り出だすと云ふことについて、如何にも面白い理屈をつけてゐる。それは右側の睾丸が、左側の睾丸よりも一般に大きいと云ふのである。或は又、左側の睾丸が、右の睾丸よりも下の方へ垂れ下がつてゐる。それで下位にある左の方が女性だ、とかう云ふのである。此樣な見解はもとより見當違いも甚だしい解釋であつて、一笑に附すべきものであること勿論だが、兎に角一寸面白い理屈ではないか。

古代の人間が、人間の身體の右側が男性であると信じてゐたのは、上記の例の外に、『カッバラーの原理』と云ふのがある。之は希臘の懷胎の原理であつて、ピタゴラスの長い詩篇の一つに『右と左、男と女、云々……』とあることによつて知られてゐる。

ヘブライ語のベン "Ben" は息子を意味する。そして『ベナイアー』"Benaiah" は神の息子と云ふ意味である。我々は創世紀の第三十五章（第十六節より第二十節）で次のこと

を讀んでゐる。

『……而して彼等（ヤコブと彼の人々）はベテルより旅をしぬ。然るにラケルは陣痛を起し大いに苦しみたり。苦しみ今や絶頂に達したる時、助産婦は彼女に語りて曰く、『惧るゝ勿れ、生まるゝは男の子なるぞ。……』斯くして彼女の魂が遙か天界に飛び去らんとしたる時（彼女は難産で死んだのである）胎み子は生れ出でぬ。彼女は息子の名を『ベン・オニ』と名付けぬ。然れ共彼の父（ヤコブ）は彼をベンジャミンと呼びたり。斯くて彼女は死し躺て葬むられたり……而してヤコブは彼女の墓の上に墓標を樹てたり……』『ベン・オニ "Ben-oni" と云ふ名は『オン』"On" の息子と云ふ意味であつて、もつとわかり易く言へば、『右側の睾丸の息子』と云ふことになる。『ベンヂヤミン』と云ふのもつまり『右側の息子と云ふ意味なのである。出産の場合右側が男性であるとして重要視されたことは上記の引用によつて明かであらう。

八、リンガム表現の種々相（其二）

リンガムは又ピラミッド形、上尖りの三角形（神聖なる男性の三角形）としても象徴される。

（註、頂點が下に向いた三角形は『神聖なる女性の三角形』と呼ばれる）

此上尖りの三角形は男性の生殖器の上部に密生する陰毛の形になぞらへたものであつて男性の陰毛は女性のそれとは全く異つてゐるのである。（女性の陰毛は前註の如く下尖りの三角形をなしてゐる。）

此三角形は古代のヒンヅウスの宗教に於ては三位一體のシムボルとされた。ヒンヅウスよりも古いアーリヤン民族の宗教に於ても同じく三位一體のしるしとして用ひられた。而して又、之は古代の埃及人の間に於ても同様に用ひられ、更に近代のキリスト教に於ても用ひられてゐるのである。

リンガムは又印度、支那、埃及、其他の東洋諸國に於ては『蓮の花』(又はその蕾)の形によつて象徴されて崇拜の的となつた。そして此の慣習は夫等の異教からキリスト教にも輸入されたがその際『蓮の花』は『百合の花』、又は『蕨尾の花』に變化した。百合の花はキリスト教の教會ではよく神のシムボルとして裝飾用に供せられ、マドンナと無邪氣な子供と百合の花とは『神聖な家族』の象徴として用ひられる。

百合は繪で第五圖の形にえがゝれる。彫刻では第六圖の形に刻まれる。又バツカス神の笏杖の形やアツシリヤのアツシュール神の手にせる松毬、其他、パイナツプル等の形に變化してゐるものもある。(第七圖參照)。

リンガムは又神の笏杖(二又となつた杖)としてもあらはされる。此場合杖は陰莖で、二つの又は睾丸をあらはす。又、クローバの葉、酸漿草などであらはされてゐるものもある。又希臘教や羅馬教の正統派の、三本の木がぶつちがひになつた十字架としてあらはされたこともあり、又ローマ教會の法王の所持する十字架の形でもあらはされてゐる。

以上述べた樣な色々の表現は、古代の埃及の宗教上の象徴物に、既に用ひられた遺跡があり、又石棺の蓋などにも多く殘つてゐる。

酸漿草は、愛蘭では三位一體の標號である。酸漿草に限らず凡ての三つ葉の草、例へば水芹などもその標號として用ひられてゐる。愛蘭人は今日でも聖パトリツクが、三位一體の說明をする爲めに此等の三葉を用ひたものと信じてゐる。

一枚の葉で、而も三つの小さい葉がある、と云ふ處が主眼點であつて、聖パトリツクの祭日には、信心深い愛蘭人は凡て酸漿草の葉で小さな房をこしらへて之を首にかけてゐる。

第八圖は印度カシミールの首都スリナガルの一寺院の堂宇である。之は男根の三つの要素をあらはしてゐる。此形は又三つ組にこしらへた教會の窓などにもよく見られる。眞中のものが兩端のものよりも長い、之は前記の堂宇の場合と全く同じ起源を有するものである。此樣な窓の一例はセント・ルイスのサウス・グランド通りの一教會にも見ることが出來る。その窓の形を一寸スケツチしてみると圖の樣な形である。(第九圖)

九、リンガムに關する珍風習（其一）

印度の森の中にはリンガムの極めて寫實的な像を安置する寺院が澤山ある。そして是等の寺々へは、子供が欲しいけれどもなか〳〵姙娠しない處の數多の婦人が巡禮をやつて、夫等の神聖な像に自分の　　觸れて、姙娠する樣にと祈るのである。

或るヒンヅウスの宗派では處女の儘死んだものは天國に這入ることが出來ないと敎へてゐる。男が死んで小兒の寡婦（印度では女兒は三歳から六歳位の年齡で結婚し、再婚は許されない。）があとに殘されたと云ふやうなことで、少女が男との關係をつけることが出來ぬやうな場合、其可憐な寡婦たちは寺へ行つて神聖な石造の　　に自分の　　押し當てゝ結婚をするのである。そして將來彼女等が天國の門に至つたときに天使が彼女たちを調べて見ても、彼女等が交合に關する義務を立派に果してゐると云ふことがわかつて、天國に入れて貰へる。と信じてゐるのである。

希臘や羅馬に於ては既婚、未婚を問はず凡ての婦人たちが、リンガムの形をしたメダルや寶石の類を喜んで身につけた。之は子供が澤山出來るやうにと云ふお呪ひである。同じ樣な護符は近代の埃及に於ても屢々用ひられてゐる。歐羅巴の或地方では、何とか云ふお祭りの日に男性の生殖器の形をしたお菓子をこしらへて、婦人達が之を上記と同じ樣な目的の爲めに喰べるのである。

姙娠した婦人たちは、よく男の生殖器の像を身につけて居つたが、之はその像を毎日のやうに見てゐると、生前の印象によつて男の子が生れて來ると云ふ信念からであつた。同じ目的の爲めに、綺麗な少年を裸にして身近く侍らした婦人たちもあつた。（第十圖參照）

八九世紀の頃フランスのデイオケセ・カールター地方のクーロム町の一尼寺が、リキストの包皮を祕藏してゐると云ふことを主張したことがあつた。（その包皮はキリストが割禮を行つた時に切りとつたものであるとのことであつた。）

それで姙娠した女が此の聖なる遺物に觸れると安全に而も易々（やすやす）と分娩するものと信ぜら

れてゐた。英蘭のヘンリー五世は、彼の妃カザリンに關れしむる爲めに、其の遺物を作りあとで尼寺に夫を返却したと云ふことが記錄に殘つてゐる。

一〇、三位一體

印度の神樣のうちの主たるものは『創造主ブラーマ』、『保全の神ヴィシューヌ』、及び『破壞と生殖の神シィーヴァ』の三位一體神である。

此の三神は希臘及び羅馬の『運命（パーカイ）の三女神』及びスカンデイナヴィアの『ノルンの三神合體』と夫々相應するものがある。

パアカイ神は全人類の凡ての運命を掌つたと信ぜられた。卽ちクロート神（過去の神で同時に紡績の神）は生誕を司つて人生の繰り糸を紡ぎ、ラケシス神（現在の神で同時に織業の神）は人生の工場で花（花輪）、橄欖（月桂冠）及び茨（刑罰）を織り出し、アトロポス神（未來の神で同時に不可抗の神）は人生の一とくぎりが終つた時に生命の綱を裁斷するものと信ぜられてゐた。（第十一圖參照）

埃及に於ても三人一體となつた神々を信ずる習慣はあつた。そしてその中には男ばかりの組もあつたが、多くは父、母及び子供と云ふ三人組であつた。例へばオシリス、アイシス及びハルポラクラツトの如きその一例である。そして埃及の象形文字で父、母、子を書くには第十二圖のやうな文字を使用した。

第二世紀の始め頃まではキリスト教は猶太教のそれと同樣單一神教であ た。然し乍ら第二世紀の中頃に至つてアレクサンドリアの大僧正が始めて（父なる神）（子なる神）の二神を崇拜することを發明し、そして次には埃及の改宗勸誘に便利ならしむる爲めに『父なる神』『子なる神』の外に『聖靈』なる神を發明し、所謂三位一體教が完成されたものである。第五世紀の終りに至ては三位一體神の法則は埃及以前の各教會に於ても漸次認めらるゝに至つたのである。

玆に掲げた挿繪（第十三圖）はサレルの僧侶たちが初めて弘めた三位一體の神人同形論

的觀念を如實に示すものである。之は第八世紀に印度から歸つた牧師たちがヒンヅウの三位一體神を眞似て創つたものと考へられてゐる。

此圖と全然同じ三位一體神の像は、アメリカがスペインからフイリツピンを獲た時にも其處の或る寺院の祭壇から發見された。

一一、リンガムに關する珍風習（其二）

古代のヘラスに於ては耕作物、家畜、家族等の增殖增產等の呪ひとして、實りの神パン（或はプリアパス神とも稱す）のシムボルを畑地に立てた。このシムボルは一般に柱狀物であるが、多くは男根が頂端について居たり、又は柱の前面に男根の圖が刻んであつたりした。第十四圖は愛の結晶を欲しい若い夫婦が、パンの男神に花環を献じてゐる處である。一物をピンと立てたプリアパス神の像は多くの寺院に安置せられ、其處へは未來のある花嫁たちが參詣する。そして尼僧に案內されて、男の生殖器に關する講話を聞くのである。

でその花嫁達は普通裸形の神像の膝の上に座つたのであるが、座はる時に神像の一物を自分の。　　こむのである。怎うして神に對する奉献として、彼女たちの」　　のである。プリアパス神の男根の永遠的剛直から、我々は今やプリヤビズムと云ふ醫學語を得たのである。

埃及の寺院に於ては、壁の下部の方が上部よりも厚く造られてゐる。扉や入口の兩側は從つて歪形になつてゐて、多少に拘らず必らず梯形となつてゐる。で側面は一番の頂上に行くと極端に狹くなつてしまひ、底にゆく程擴がつてゐる。寺院の入口の兩側は重々しい彫刻で一面に飾られるのが普通であつて、その面は二つ以上の羽目にしきられてゐたのである。

我々は此處にセチ神に對して奠酒を捧げてゐるフアラオ・メネフタをあらはした繪を見ることが出來るが、之はカルナツクの一寺院の入口の羽目に彫られてあつたものである。（セチ神は埃及の『生命を與へる神』である。（第十五圖參照）

此神は此處に最も寫實的にあらはされ、崇拜の目的物――卽ち男根が最も大膽に示されてゐる。

同じ入口の反對側の羽目には之と同樣の彫刻があるが、前の圖で實性を寫した男根は『ウアスの杖』で置き換へられてある。この『ウアス杖』は男根の象徵物であつて、睪丸の部分は矢の根の形をしてゐる。第十六圖を見ていたゞきたい。

一二、男性の三角形

埃及のピラミッドは造物主セチの巨大なるシムボルである。私は既にこのシンボルについては說明を試みた積りである。卽ち之は男性の陰阜を蔽ふ陰毛の三角形の形を基礎とする所謂『神聖なる男性の三角形』なのである。

ピラミッドは之をこしらへた歷代のファラオ（埃及古代の王朝の王稱）の墓場として造られたものとのみ考へるのは當つてゐない。このピラミッドを造つたカイオプス王は紀元前三千五十年頃に生存した人である。ピラミッドの高さは四百八十呎で基礎に於ては七百六十四呎の平方となつてゐる。或る學者たちは之は最初アピスの牡牛の爲めの墓標として造られたものであるとの憶測を下してゐる。

ラスキンは中世紀のキリスト敎々會から發見した繪（第十七圖參照）に就て批評を試みてゐる。彼曰く、ゴシツクの美術作品は非常に荒削りである。此繪は愛の男神の像を畫いたものであるが輕卒にも口を畫き忘れて、眼と鼻ばかりの顏を畫いてゐる。と。是に依つて之を觀るに、ラスキンは、此繪が『男性の神聖な三角形』をゑがいたものであると云ふことを知らなかつたらしい。そして實際は『リンガムと睪丸』とを畫いたのであるのに、それこそ輕卒に『目と鼻』であると誤認してゐる。若しもラスキンが此繪の眞實を知つてゐたとすれば、彼はその眞實を述べることを欲しなかつたものに相違ない。

『ウキルト・ゲメールデ・ガルレリ』（註、獨逸版の『世界名畫集』）の中に、我々は一枚の銅版のカツトを發見する。それは燦然と耀いてゐる藪の中に、モーゼの祈りに答へて現は

れ給ふたところの神をゑがいたものである。(第十八圖參照) 此繪に見える神のシムボル卽ち男性の三角形は、男性の神エホバをあらはすものである。我々は之と同じ樣な繪を此畫集の中に、更に數枚發見することが出來るのである。

『クルフユーエルステン・ビベル』はルーテルが選帝侯の爲めに古い聖書から飜譯した繪入のバイブルである。この本が『クルフユールステン・ビベル』と呼ばれるのは、此本の扉に、ルーテルの宗教改革を援助した選定侯たちの似顔畫が描かれてあるからである。此本はとても大きな本で重量約三四十封度あり、數多くの珍らしい畫が、銅版の挿繪となつて載せられてゐるので有名である。(千七百六十八年出版)

第十九圖はその大バイブルの第一頁の圖である。ビブリア (Biblia 聖書) と書かれた文字の直ぐ上の、直上せる三角形卽ちピラミツド形に注意していたゞきたい。此三角形の上の軒蛇腹に天使の顏が見える。之は聖マツシユウをあらはしたもの、次のライオンの頭は聖マコ、牡牛の頭は聖ルカ、最後の鷲の頭は聖ジョンをあらはしたものである。

向つて左手に見える人はモーゼで、左手に二枚の石版を持ち、右手でイエス・キリストを指さしてゐる。之は舊約聖書が、同書中の豫言、神の掟、神の豫言等の應驗であるところのキリストの先驅であつたことを象徴してゐる。

キリストは素裸でゑがかれてゐる。之は彼が『罪なき人』であつたことをあらはしてゐる。着物は時として罪のしるしであるから、之を纏はずに表現されたのである。

此繪に見える二つの建物の土臺のうち、左手の方はアグナス・ダイ卽ち『神の小羊』であつて、小羊は虐殺に處せられ犧牲となる爲めに、嚴重に手肢を縛されてゐる。之は人類の諸々の罪を贖はんとしてゐるイエス・キリストを諷出したものである。右の方には聖餐用のカツプと血とが畫かれてゐるが、之は云ふまでもなく、新約聖書中にある最後の晩餐に於けるキリストの神約的犧牲を象徴するものである。そして是等多くのシムボルは、その源に遡つて探究すれば、何れもその起源を男性生殖器に起つてゐることを知ることが出來るのである。

第二十圖は、ネボ山上でモーゼに現はれ給ふた神を畫ける圖であつて、神がモーゼに對して、例の十誡を記した小板を授け給ふ場面である。此繪に於て、男性の神聖なる三角形がエホバ神をあらはしてゐること、前の圖と同樣である。古代の猶太人の間に於ては崇拜の目的物として像を用ひることが嚴禁されてゐた。

『汝等は崇拜せんとして如何なる像をも彫さむからず。高き天界、低き地上、更に地よりも低き水中に在る如何なるものについてもその像を造りて拜跪すること勿れ、又之を崇拜すること勿れ……』（出埃及記第二十章第四節第五節）

此誡めは古代のイスラエル人に於ても守られてをり、モハメット教徒の間に於ては更に嚴重に遵奉されてゐた。乃でモハメット教徒は上揭の第四節の詩句を取り來つて、斯る彫像禁止の掟とした事實がある。そして彼等は肖像畫、あらうが美術的の彫刻であらうが、兎に角『像』を作つて拜跪することを絶對的に嚴禁したのである。從つて富裕なトルコ人は、大理石や鑄銅の女神像を造る代りに、ジエオージヤやサーカシヤの奴隷の美少女の像

を造つて、自家の裝飾としたのである。

斯くの如く神は單なる象徴物によつてあらはされ、像としては表現せられなかつた時代があつたのである。そして第十八圖、第二十圖等の三角形は、神をあらはす爲めには、實にもつて來いの面白い思ひつきであつたと云ふことが出來る。

前述の『クルフューエルステン・ビベル』の中には、第二十一圖に示した挿繪がある。（同書の聖ジョン使徒行傳第五章中）、正面の神像の頭上に耀く三角形の背光は云ふまでもなく男性の三角形である。

同樣に、此の同じ三角形は第二十二圖に示した繪に於ても、神の背光として用ゐられてゐる。此の繪は死せる人々の靈魂の昇天を祈る爲めに行はれた彌撒（舊教の祈禱）に對して、靈驗立ち所にあらはれ、煉獄の闇から一死人の靈魂が釋放されて昇天するさまを示がいた近代畫の一つである。

一三、男女三角形の混同

中世紀のキリスト教會的美術に於ては三角形の變化したものが、三位一體をあらはすために用ひられてゐた。（第二十三圖參照）男性及び女性の三角形の區別は、其時代に於ては幾分曖昧であつて、女性の三角形が往々にして男性の三角形と混同して用ゐられてゐる。第二十三圖を解說するならば "Est" は英語の "is' 卽ち『……である』、"Non est" は英語の "is not" 卽ち『……に非らず』、"Poten"（＝Father）で父、"Filius"（＝Son）で子、"Sanctus Spiritus"（＝Holy God）で聖靈、"Deus"（＝God）で神である。之と殆ど同樣な三角形は今日に於ても教會の窓を飾るステーンドグラスに用ひられてゐる。セント・ルイスのエピスコーパル寺院の窓の如き卽ち之である。

此三角形は又Y、M、C、A（基督教青年會）の戰鬪的行動の象徵（シムボル）としても使用されてゐる。（第二十四圖）之は第二十三圖と同樣女性の三角形であるが、最初に用ひ始めた人が

男性と女性との區別を知らず、何でも三角形なら三位一體のしるしだ位に考へて用ひ始めたものらしい。圖に見る如く此三角形の三邊にはプラトーの箴言——人間の三位一體的性質をあらはした箴言——が記されてある。プラトーは、人間と云ふものは肉體（Body）、精神（Mind）及び靈魂（Spirit）の三つから成り立つてゐると敎へてゐる。女性の三角形を用ひたことについて、立場を換へて見ると次の樣なことも考へられぬことはない。卽ち勇敢なる若人たちが、最も神聖なる目的物（卽ち女性の純潔性）を犯さんとする敵（註、欲望を指す）の野獸的襲擊並に濫用に防禦せんが爲めに、特に女性の三角形を意識的に採り用ゐて、之をY、M、C、Aの戰鬪的旗幟としたのである。と。Y、M、C、Aの戰鬪的旗幟の總てが、例外なく女性の三角形を用ひてゐる事實から推せば、或ひは此樣な見解が正しいことになるかも知れない。

一四、愛の神とバッカス神

第二十五圖はキューピッド（或はアーモア、エロスとも云ふ）がニンフ（水を司掌する美女神）に挑みかゝつてゐる畫であつて、「拒絶された愛」と題するものである。愛の神キューピッドは、普通には弓と矢とを持つた像、又は矢のいつぱい這入つた箙を持つた像でゑがかれる。此場合矢は適法な愛即ち夫婦の愛（婚姻せる愛）によつて、したリンガムのシムボルとされてゐる。（第二十六圖をも參照されたし）之と同じ樣な考へ方をしたものが、印度の美術的作品の中にも發見される。第二十七圖はカーマ・デヴア（即ち印度の愛の男神）が蓮の蕾で造つた矢を射てゐる處をあらはしたもの、蓮の蕾と云ふのは既に說明した如く男性の道具即ちリンガムをシムボライズするものである。弓は甘蔗の莖でつくつたものと考へられてゐる。此の神は屢々鳩の上に乘つたり又は燕の上に乘つたりしてゑがかれてゐるが、鳩と燕とは共に絕倫なる　的精力のシムボルとして用ひられるものである。

デイオニソス神（又の名はバツカス、酒、泥醉、放蕩の神）は、古代のギリシヤ人やローマ人の間には、非常に信仰されたものである。そして同神の祭日の儀式には、言語同斷な　放縱がつきものであつた。

デイオニソス神の笏杖は、葡萄の房に似た彫物をその頂上に附けた杖であつた。（その葡萄の房のやうなものは植物學ではセルサスと呼ばれる。）そして此の杖は今日ではセルサス笏杖として知られてゐるのである。（第二十八圖參照）その彫物の形は必らずしも正確に一定してあらはされるわけではなくて、或時は松毬の形ともなり、又或る時はパイナツプルの形ともなつてゐる。此シムボルは義しからざる愛、激情、肉慾などに支配された陰莖をあらはすものである。此の形はキリスト教々會の屋根の裝飾などには極めて一般的なものであつて、例へばローマのセント・ピーター寺院に於けるが如き即ち是である。

第二十九圖は近代になつてから畫かれた繪であるが、之は一少女が　と戲れてゐる態を諷刺的にゑがいたものである。（少女の手にしてゐるのはデイオニソス神の棹であつて頂端に松毬狀のものがついてゐる）

又第三十圖は人間の心の中で義しき愛と義しからざる激情即ち情慾とが葛藤する態を藝術的に表現した繪である。右腕につかまつてゐるエロス（愛の男神）の手にしてゐる矢は義しき愛の衝動により　リンガムのシムボルであり、バツカンテ（即ちバツカス神を信仰する尼僧）の左手にもてる握り太の杖は　の刺戟によつて　リンガムのシムボルである。

希獵の愛の神『エロス』の名から、我々は今日『エロティツク』（色情的）と云ふ言葉を得、又羅馬に於ける愛の神『アーモア』の名からは『アーモラス』（情熱的）と云ふ言葉を得た。其他の多くの似通つた言葉も亦是等の言葉からだん〳〵分離變化したものである。

一五、聖アントニーの誘惑

『聖アントニーの誘惑』は近代美術の採り用ひる題材としては、極めてポピュラーなものである。聖アントニーは當時稀に見る聖者であつて、獨身の隱者であつたが、彼の隱れ家

には彼を慕ひ、彼の教へを乞はんとする信者が雲の如く集まり、彼はそれ等の群集に對して親切にキリスト教義に關する說教をするのが常であつた。彼の嚴格と制慾とは實に何人も一點の非難を加へる餘地のない程立派なものであつた。

偶々或異端的な人々は彼の名聲を嫉視し、此の聖者の教化力を覆滅せしめんと圖り、人をして彼を誘惑させ、その現場を捕へて一擧に彼の面皮を發ばき、その名聲を失墜せしめんと試みた。此計畫を實行する爲めに雇はれた或る美麗な高等淫賣婦が、彼に毒汁のやうに甘味な手練手管をかけて誘惑しやうとした時に、此聖人はその誘惑の魔手から遁れんが爲めに自分の舌の端を一と思ひに嚙み切り、そしてその苦痛の力によつて、眼の前にちらつく誘惑的幻影を追ひ拂はうとし、又彼女が彌が上にも刺戟するところの肉慾的情念を拂拭せんとしたのである。

元よりこの話は彼聖者の獨棲的修業中に夢寢の間に襲ひ來つた俗念的誘惑の『記念すべき寫像』を、單なる誤話として傳へたものと見るが至當であらうと考へる。そしてこの話

はウキリアム、テルと林檎の話、又ワシントンと櫻の木の話と云つたやうな歴史的捏造話と其の軸を一にするものであると見るのが、蓋し正鵠を得た解釋であらうと考へる。

キリスト教以前の宗教であるノスチク教を信奉したメナンダーと云ふ人は次の様なことを云つてゐる。

『全世界の地上及び水中に棲息する野獸のうちで、最も偉大なものは女である』

早い頃の凡ての教會の教父たちも亦、之と同じ様な意見を持つてゐた。そして古代の聖人たちは、女は聖からざるもの、男を誘惑する爲めに造られたものであつて、凡ての男性は、凡ての罪惡と惡魔とを遠さけると同じ意味を以て女を遠さけねばならぬ。と云ふことを語つてゐる。聖ポーロでさへも『男は女に觸れざるを善しとする』(コリント書第七章第一節)と語つてゐるのである。要するに古代に於ては、性的の關係をつけることが、凡ゆる犯罪のうちで最大のものであると考へられたことがあつたのである。

詩人グラヴイーユは歌つた。

『アダムの昔から、男は女に迷はされる莫迦者、
イヴの昔から、女は惡魔の道具となつて働く者。
女無く、地獄の恐怖がなかつたならば、吾等の刑罰は一つ減つたものを!』

又ミルトンは『失樂園』の中で奚じてゐる。

『おゝ、神は又何故に、最後に
此の珍奇なもの(女)を地上に創つたのであらう?
何故に此の『素晴らしい自然の缺陷』(女)を創つたのだらう?
そして何故に、女の居ない世界をつくつて、天使のやうな男を充滿せしめなかつたであらう?』

キリスト教の生れた頃(そして事實に於てはキリスト教の生れる遙か以前の頃からも)、

所謂難行苦行者たちは、最大の快樂を與へるものを征服することが、最大の德であると考へてゐた。そして其等の難行苦行者たちの大多數は、女性と性的關係をつけることが、凡ての快樂の最上と考へてゐたので、勢ひ女性との關係を極端に呪詛することゝなり、凡ての肉體的慾望を征服する爲めに、或は斷食し、或は種々雜多な自己抑制や難行苦行を行つたのである。(これと似た樣なことは、現代の或る宗教に於ても、獨身者の掟として行はれてゐる。)そして若しも是等の修養方法が女に對する欲望を抹殺し去ることに成功しなかつた時には、彼等は誘惑から遁れる爲めに斷然自ら去勢し去ることすら躊躇しなかつたのである。バイブルの中にある次の敎へに從ふには、さうする外はないと考へたのである。

「然ど我なんぢらに告げん。凡そ婦を見て色情を起す者は、心のうちすでに姦淫したる也。もし右の眼なんぢを罪に陷さば、之を抉り出だして棄てよ。そは、五體の一つを失ふは、全身を地獄に投げ入れらるゝよりは勝ればなり。もし右の手なんぢを罪に陷さば、之を斷り棄てよ。蓋し五體の一つを失ふは、全身を地獄に投げ入れらるゝよりは勝れり。」(馬太傳第五章第二十八節——第三十節)

一六、二種の十字架 (リンガムのシムボル)

所で聖アントニーは、斯くの如く自ら苦痛を求める難行苦行者、狂信者流とは異つて、肉體の普通の誘惑にも敗けるやうな人であつたと云ふことを示す爲めに、中世紀の藝術家たちは、この聖人の紋章として、リンガムのT字形のシムボルを彼に添加したのである。千五百二十五年にフォン・レイデンの描いた木版畫を見ると、T字形のシムボルが襟のところに畫き出されてゐる。(第三十二圖參照)

此挿繪に見える誘惑の女は、頭の上に二本の角があるのでわかる通り、惡魔の化けたものである。そして此女が操正しい純潔な人でないと云ふことは、彼女の姙娠して太皷の樣にふくれあがつてゐるお腹で暗示されてゐる。中世紀の藝術品は、其の表現に於て往々にして、不快なほど露骨で、且つ粗暴である。けれどもその意味が明瞭にわかる樣に表現さ

れる點に於ては、一般に申し分の無い程成功してゐる。

同じ樣な考へは、ワイマールで發見された祭壇の一片にも表現されてゐた。それにはT字形の十字架でかこまれた棒が畫いてある。此T字形の十字架は、前述のやうな因緣から『聖アントニーの十字架』と呼ばれてゐる。

そして之は古代人が磔刑に用ひた十字架の形であつた。磔刑に處せられてゐるキリストの頭上に見える部分は、實は十字架の一部分では無くして、次の樣な嘲弄の文句を書きつけた立て札であつたのである。

『Jesus Nazarenus, Rex Judaeorum』（猶太の王、ナザレのイエス）

初期のキリスト敎の建築に於ては、之は又敎會や寺院の地繪圖の形であつた。恰度現代に於ては四脚のものやラテン風の十字形が用ひられてゐるやうに。

ラテン風の十字架の起源は、凹い輪（ヨニ）に取りかこまれた棒（直立せるリンガム）の形から來てゐる。此の形は今日に於ては、トルコの菩提所にある墓石としてさらに見受

けられる。卽ち第三十三圖は、其形を模寫したものである。

第三十四圖も亦、棒（リンガム）と圓輪（ヨニ）との同じやうな結合を示し、更に性交（二つの性の交合）を示すところの繪である。

これはラスキンが上記の二種の十字架に就いて語つてゐるが、その意味をよく說明してゐる。

ラスキンは何と言つてゐるか？　彼は、T字形の十字架は『苦惱の十字架』（女子によつて滿足させられない男子）であり、又ラテン風の十字架は『勝利の十字架』（女子との結合により滿足を得た男子）であると言つてゐるのである……。

餘り長くなるから此の稿は此位で止めて置く。

（第二部）女陰崇拜史

女子の外陰部卽ち陰門（第一圖參照）は、印度では『ヨニ』と呼ばれる。東洋の諸宗教に於ける女陰の崇拜者は『ヨニシタス』と一と口に呼ばれてゐるほどである。以下、私は女陰の文字を避けて『ヨニ』と書き記るすことゝしよう。

『ヨニ』は梵語であつて、陰門子宮物々の起原等の意味を持つ、詰まり自然界に於ける女性的活力の意である。神は世の中を創造せんとして自分自體を二つに分かち給ふた。梵覽摩（ブラフマ）と自然界（ナチュラ）とが夫である。梵覽摩からは凡ての男性が創られ、自然界からは凡ての女性が造られた。そして女性の方が天地萬物間に於ける眞實の力であつて、最も崇拜に價するものとされてゐる。

私は最初先づ生產力卽ち創造力、及び『ヨニ』を具象化した象徵（シムボル）について話さう。此繪

第一圖　陰門とそのシンボルなる兩尖楕圓形

第二圖　トロイの廢墟で發見した土偶。三角形の中のXに注意

（第二圖）は、ジョリイマン氏がトロイの古鄕の遺跡から發掘した偶像の寫眞である。恐らく圖千年以前のものであらう。圖中の中程の三角形の部分を注意して戴きたい。そして三角形を見落さないやうに……。此寫眞をインシュタアの一つ（第三圖）と比較してみるとよくわかるが、　の表現方法は全く同一で粒々の玉を集めた樣になつてゐる。之は原始時代の　表現に共通した特徵である。

同じ樣な繪は、南歐往時の原始的の

第三圖　イシュアの女神

第四圖　ネトベの女神

英國博物館藏

穴居人種ドロゲロダイトの遺した彫刻の中にも屢々發見される。この人種は少くとも三千年以前に住んでゐたものとされてゐる。

男性が、その　　を最も神聖な且つ獨占的な所有物として大切にする如く、　を意味する女性の三角形は、人生に於て最も神聖であり、純潔であり、貞節であり、且つ眞實であるものとして『神聖』そのものゝ象徴とされた。この意味に於て、埃及の古い宮殿から發見される女神の多くの像は

第五圖　女性の物を持てる埃及の女神

何れもこの三角形を持つてゐる。例へば第四圖のネトベの女神の像が夫である。この三角形は時として女性の神聖な標箒即ち横向きの乳房となつて現はれることもあるがこの例は寺院の彫刻の中に發見されてゐる。（第五圖）

此三角形はまた、諸斯土教徒（グノイスチック）及び古代の基督教徒時代には文字の魔除けとして用ひられた。其うちで、最もよく知られてゐるのはアブラカダブラ（ABRACADABRA）と云ふもので、この語原はAb, Ben, Ruach ACADosoch の花文字の分をとつ

ABRACADABRA
ABRACADABR
ABRACADAB
ABRACADA
ABRACAD
ABRACA
ABRAC
ABRA
ABR
AB
A

ABRACADABRA
BRACADABR
RACADAB
ACADA
CAD
A

第六圖

て綴つたもので、ヘブライ語で、「父なる神、予なる神及び聖靈」と云ふ意味になるさうである。（第六圖參照）メダルに之を彫つて置くと病魔と不幸とを除けるトテも靈かな魔除けになると信じられてゐる。第六圖の樣な配列は言ふまでも無く女性の三角形に象られたものである。

三角形の下部に割れ目を持つた三角形の思ひつきは、此處に說明する迄もなく女陰崇拜の寺々にある祭壇の上に、兩脚を投げ出して座はつて御座る裸婦像のそれから來たものである。東洋に於ては婦人が　つとめをする時には、　抜いたり、或は除毛劑を用ひたりしてにするのを禮としてゐるから、さてこそ下部の割れ目が判然するのである。或は又發毛しない處女のそれからの思ひつきなりとする說もある。春情發動機になると少女のお臀は膨れ、おちちは大きくなり、そしてえかゝつて來る。此の　を引つこ抜いて仕舞ふ、東洋人とは違つて、西洋人は、之を生えるが儘に生長せしめ、そしてそれを豐滿な肉體とよく調和する美くしいものと考へる。埃及の或る壁畫に、透明な衣服を着けた一婦人の像が

第七圖　處女の陰部の模型。豐饒のしるし。

第九圖

第十圖

第八圖　メキシコの畑に於ける豐饒の標木。

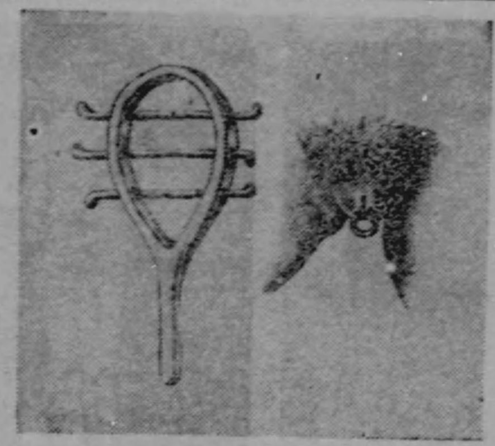
あるが、これを見ると明かに三角部にしてゐる。そして傳へられる處によると埃及の婦人は此部分に香水を撒いて特に魅力あらしめる事に苦心したと言ふことである。昔の埃及人や、猶太人は、

がつよ〳〵しく生えてゐればゐるほど、その　　立派な魅力に富んだものと考へた。乃でエゼキエルは聖地エルサレムを若き花嫁に譬へて恁麼ことを言つてゐる。『汝は今や比ひなき裝飾物となりぬ汝の胸はふくよかとなり、汝の毛は嘗て裸かなりし處に生ひ揃ひぬ……』（註、エルサレムが聖地となつたお蔭で、荒野から立派な町になつたと云ふ意を述べたもの。）吾々男は普通、女性

第十一圖　ヴエナス像（羅馬に現存）

第十二圖　シスタラムを持てるアイシス

の　　と云ふものを好むものらしいそしてその喜び、之を小猫（プッシー）と呼んで戯れたりしてゐる。婦人は一體性的抱擁については、男性よりも多少に拘らず感受性が鈍いものである。乃で大ていの場合、境地に惹き入れるには、例の或は、したりすることが必要なのである。男性が最も普通に行ふ處の愛撫は、



第十三圖　シスストラムの起原とその意味

東方諸國に於ては、聖書に書かれてある如く、『ヨニ』を『子宮の門』(陰門)と呼んでゐる。唯今述べた愛撫のことについて、『ソロモン』の歌の中に花嫁は、次の春に愛人との添寢のことを歌つてゐる。

『わたしの愛人は、彼の手をわたし
　　そしたらわたしの腸は、彼の方へずるずると引き寄せられる樣な思ひがした……』

男が女の　　女の性感が素裸にされた　　のである。

實にも美はしきものゝ限りである。第七圖は石膏で造つた處女の陰

第十四圖　中世紀の貞操帶

阜であるが何と魅力があるであらう！

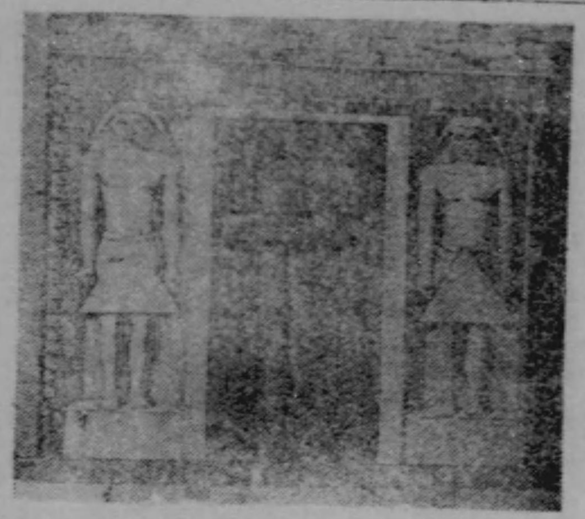
の間のなだらかな稜角、兩股の間の股肉、それから兩つの　　の間に引かれた　　をよく注意して見るがいゝ。これは『豐饒の標』とされてゐるが同時に又純潔の象徴でもあるのである。

此處に一枚の寫眞（第八圖）があるが此處に見えるのは、此畑に蒔かれた種子の豐かな收獲とならんことを祈つて立てられた『豐饒の標機』であつて、メキシコの畑に於ける一例である。此圖と全く同じ形の標しが全く同じ目的に用ゐられ

第十六圖　「貝の中のヴエナス」フイネイリ作

る例は他にもある。印度のヒンヅス人は第九圖のやうな標木を、又ニューメキシコのヴニス人は第十圖のやうな標木を、何れも豐年の兇として用ゐてゐる。

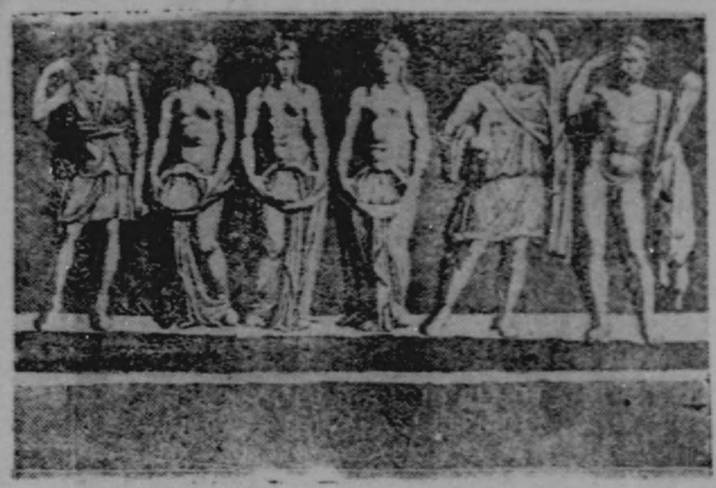
現代の畫家や彫刻家は、その繪や彫刻に於て、目を些しも書かない然し昔の人々は、完全な女性を讃美して目を具へた　を極度に崇め之を神にさへ祀つてゐるのである。前掲第三圖はイシュターの像であるが、之は昔のフォイニシヤ人（ツヤリの海岸地方に住める種族）が豐作の女神として祀つ



第十七圖　埃及ドセーの墓守の像

たものであつてベル（又はバアル）の娘に當たる女神である。陰毛の表現はトテも奇拔だが、前述の如く恁う云ふ表現はよくあるのである。この像の原像は象牙で作つた小さな像で、今は英國帝室博物館に保存されてゐる。

アフロデツト卽ちヴエナスの女神は、希臘人及羅馬人の間では肉體の愛及び色々な意味での愛の象徵とされてゐるが、この女神の像は、いかにも女らしい魅力を持つてゐる點で世人の注意を惹いてゐる。女らしい魅力とは何ぞや？　曰く、豐かな乳房、



第十八圖　ヨニのシンボルなる貝を持てる水の精

羅馬語で言ふブーデンダム即ち　限り無き美くしさ……が夫である。（第十一圖參照）

ヴェナスを祀る寺々には無數の男女が蝟集し、その神殿で　に浸り乍ら彼女を讃美するのである。ヴェナス（Venus）の名の第二格（所有格）はヴェネリス（Veneris）である。そして最後のシラブル（綴り）を不定形（インフィニティブ）で終らせたのが、"Veneratio"（ヴェネレート）と云ふ文字で、この文から"Veneration"（ヴェネレーション）又は"Venerio"（ヴェネリオ）と云ふ字が出て來てゐる。ヴェネレエションと言ふ言葉は、昔は崇拜と云ふ意味に使はれたのであるが、今日では、唯單に崇拜

第十九圖　バリンツンの姉妹

すると云ふ意味に使はれる樣になつた。

然るに一方に於いては、女性の崇拜と云ふことが、實に種々雜多な形式の崇拜禮讃に變化したのである。これが反對の極端に走つたものは惡魔的所業となり惡虐無道な振舞となつてゐる。譬へばよく引き合ひに出されることであるが、舊約全書の一節でこんな處がある。即ちモーゼがイスライル人に向つて、敵國の男を屠殺にせよと命じ、未だ生れざる男子も逃す勿れと命じ、「男と寢て男をしれる婦人を盡く殺せ」（民數紀略第三十一章第十

第二十圖　マヤ、テヴアの女神像二體

七節）と告げてゐる場面がそれである。又同じ舊約全書の列王紀略（下）の中で、イスライルの王であるガデの子メナヘムが、テフサを擊つたときに、『その中の孕婦をことごとく刳剔』して了つたと云ふことが書いてあるがこれもその一例である。（列王紀略下第十五章第十六節）

豫言者ホセアはサマリヤについて次のやうな呪ひを語つてゐる。

『サマリヤは虜て荒廢に歸するのであらう。サマリヤの子は碎けて粉となるであらう。（何西書第八章第六節）

第二十一圖　ニヨの像

第二十二圖　婦人の楕圓形的輪廓

第下圖は上圖を表す

アシスルーホ

此の樣な行爲は、小亞細亞地方の人々の戰爭に伴つてよく見受ける現象である。昔と言はずつひ數年前（と言つても歐洲大戰前であるが）土耳其がアルメニア人を虐殺した時に、孕み女を捕へ來つてその子宮の中の胎兒が男であるか女であるかに賭をして、その賭を決める爲に後で

たと云ふことが傳へられてゐる。

シストラム（第十二圖參照）は、昔て樂器の一種であると考へられてゐた

第二十三圖　聖たる胚胎（一五二四年）

何故なら、埃及の古い寺院では、宗教上の舞樂と一緒に用ひたからである。然し是は本統は矢張錠を掛けた『ヨニ』の像であつて、詰まり處女の印しなのである。第十二圖は、マリアがイエスの純潔なる母である。如く、ホールスの純潔なる母として知られてゐる女神アイシスの像であつて、手にせるシストラムも實に彼女の處女を象徴するものに外ならないのである。

此象徴の始原はスダン地方にも今日猶殘つて其習慣から容易に探り得るのであるがこの風習が遠き〳〵昔から存したことは、

第二十五圖　復活のキリスト

明かなる事實であらう。亞弗利加に於ては婦人は財産即ち動産である。そして賣つたり買はれたりするのである。そして他の國に於けると同樣、處女は非常に珍重されるのである。從つて亞弗利加の或地方では、父親が娘の　を鐵の輪で目釘する。（第十三圖參照）その鐵輪は娘が夫となる男に賣られる時まで殘つてゐるが、夫は女を迎へるや否やその鐵輪を鑪で切り取り、その代りに南京錠を嵌め、その錠を開く鍵は彼だけ持つてゐる。

此れと同じ樣な處置が、比較的近代ま

第二十四圖　マリヤとエリザベスの會見

で、我々自身の祖先の間に行はれてゐた。事實或る著者たちは、この貞操環が歐羅巴の原始的な社會に於て今日でもなほ用ひられてゐると言つてゐる。

中世紀の『貞操帶』は普通一般社會に用ゐられたものであつて、その遺物は今日歐羅巴各地の博物館に多數存してゐる。（第十四圖參照）斯の樣な道具は、忍耐づよいグリセルディス（ボツカチオやチョーサーの著書の中にあらはれる非常に貞節な婦人の名）の存在が可能であつた時代に於てのみ用ひることが出來たのである。その時代と

第二十六圖　生命の門に現はれし聖母マリヤ

云ふのは『失樂園』の中でエヴがアダムに

『貴方の御命じになることなら、私は何でも爭はずに從ひませう。神はわたしにお告げになりました。『神はお前の法律であるぞ』と、そして貴方は私の法律です。この上智慧を增さぬことは却つて女の爲には幸神です。

と言つてゐる樣に、女性が男性に對して絕對的に服從するやうに敎へられてゐた時代のことである。

これは基督敎徒換言すれば、新約聖書

第二十七圖　中世紀のメダル、圓形は乳房、三角形は陰阜
卵形楕圓形はヨニをあらはす

の示す教義である。使徒ポウロがコロサイ人に送つた書翰（第二章第二十二節）には

『世の妻たちよ。汝等は神に仕ふる如くその夫に仕へよ。されば、教會が基督に屬する如く、世の妻人は凡てにつけて夫の意の如くあるべし……』とあるのがそれである。

私は『ヨニ』と、子宮の象徴された事物について、此處では餘り多くの紙數を費やすことを避けよう。昔の宗教が主として自然界に於ける現象の性的解説であ

第二十八圖　英國リンチフィルド寺院の印符

第二十九圖　ダムブレーン修道院の窓

つた如く、多くの自然物亦此等の宗教的理念を以て説明されたのである（例を擧げるならば、希臘人及羅馬人にとつてオセアヌス（海洋）は父であり、ガエア又はテルラ（地）は母であり、河川は子供等であつた。洞穴や洞窟は子宮のシムボルとなり、弓形のもの、洞穴や墓場への入り口などは『子宮への門』即ち『ヨニ』のシムボルとなつたのである。或スジアの寺院では低い場所即ち聽衆席は楕圓形であつたがこれは女性

第三十一圖　ヨニの神マハカリ

第三十圖　グリツフインの像

を象徴するもの、又會堂の尖塔は男性を象徴するものであつた。同様に凡ゆる種類の函や櫃――たとへば『契約の櫃』（アークオヴコウナント）（十戒を刻せる二枚の石を納めし櫃）――の如きは女性を表はすものと考へられてゐた。

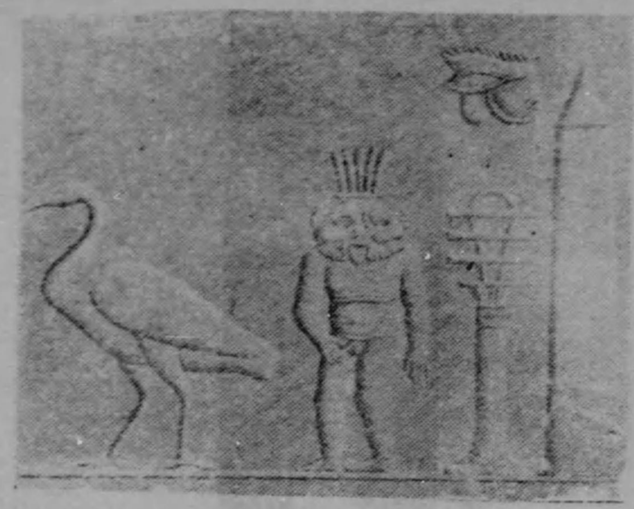
多くの洞窟は、今日に於てもバガン地方のみならずキリスト教國に於ても神聖化されてゐるが、昔はより一層崇拜して之を祀つたものであつた。例へば印度に於けるウムメルナース窟は『神聖なる牡牛』が崇拜されるので有名な巡禮場とな

第三十二圖　埃及の寺院の妙な柱

つてゐる。この寺は非常に神聖な場所となつてゐるにも拘はらず本尊の牡牛は非常に小さくて、漸く人間の膝の高さぐらゐしかないのであるが、これは明かに瘤牛（ゼブルブ）（印度特産の牛）をあらはしてゐる。

近代では洞窟が處女を表象してゐることがない。例へばルールデスの如き是である。

教會の窓や壁龕などが往々にして『ヨニ』を暗示する様な形に造られることがある。そしてその凹には宗教上の神像佛



第三十三圖　埃及のフーター神

像などを安置してゐることが多い。

或宗教では信心者が半圓形穴、又は平たい石をくり拔いた『ヨニ』の形をした穴を潜る習慣があるが、これは『生れ代はる』と云ふ意味があるのであつて、罪ある者がその罪を清めると云ふ意味である。

貝が『ヨニ』のシムボルとして使はれることは普通である。ヴエナスはよく貝と一緒に安置されるのを見受ける（第十六圖）此については貝が海から取れると云ふことから聯想を逞しうして、ヴエナスが海の泡から生れ出でたと云ふやうにコジつけの説明をしてゐる

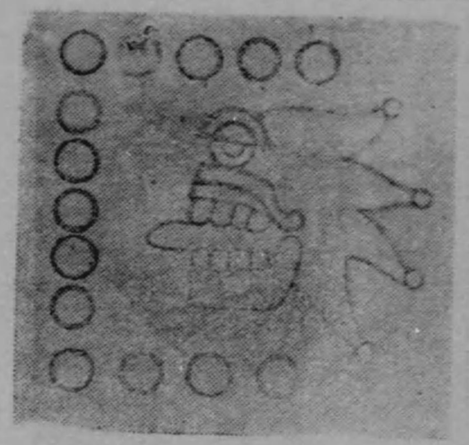
第三十四圖　アラスカのトーテムテ柱

ものもある。然し乍ら此樣な説明の當て欲らない貝の繪なり彫刻なりが多くの藝術家によつて殘されてゐる。私は更に進んで、もう些し眞實らしい解説を試みて見よう。

ヴエナスが肉慾の女神である以上、ヴエナスと貝との關係を諒解することは決して困難な事ではない。その貝は『ヨニ』の表象なのである。

私は此處に埃及の或墳墓の入口に彫刻されてあつた二人の番人の繪を示さう。

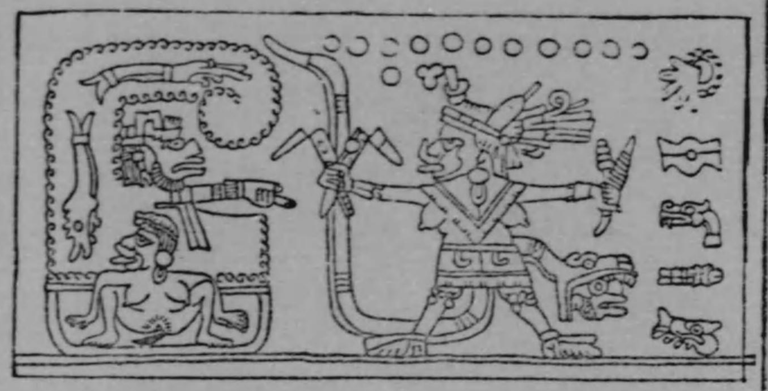
此繪（第十七圖）に見える三角形は、其の在處から察して明かに、前に説明した三角形



第三十五圖　アヅテツクの頭部（キンギスボローよりの）

と同様『ヨニ』のシンボルである。それと同じ様な格好で、同じ様な場所に捧持された貝は、疑ひもなく『ヨニ』のシムボルでなければならぬ。第十八圖はエムーヌキュビウスの或寺院の奉納額に彫まれた水の精の像であるが、此繪を見れば一目瞭然である。

バリソンの姉妹が此國に來た時に、世界中で最も不良な少女として謳はれた。彼等は踊妓であり歌ひ手であつた。彼等が有名な歌と踊りとで騷がれた姿態を此處にお目にかけよう（第十九圖）この姉妹たちの歌と踊りとは『私の小猫を見て頂戴と云ふ演題だつたのだ』何と諸君彼等が黑い小猫



第三十六圖　アヅテツクの蛇禮體拜圖

を持つたさまを見たら、小猫が何を意味するかわからぬ人は一人もあるまい。奉納額の貝が何を意味したかは、此を見ても餘りに明瞭な筈である。

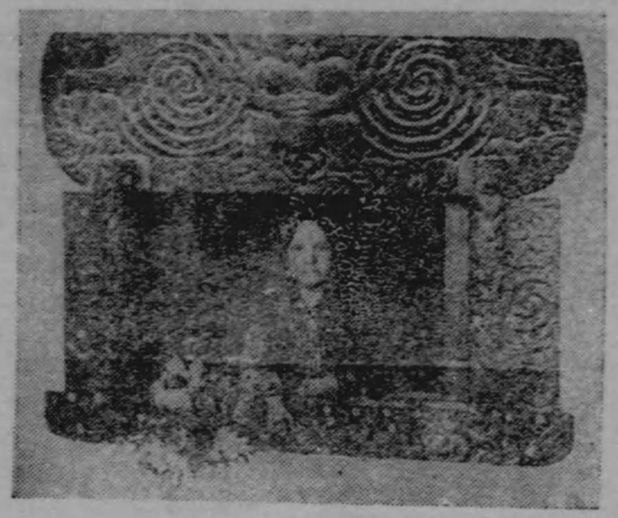
羅馬人がお寺に參詣する時には、彼等は神なり女神なりを拜む前に、先づ以て神前に、先づ以て神前の『聖水』の入つた洗盤に手を浸す習慣があつた。手を浸すと、その手に接吻してそれを神に向つて振つた。（詰り投げキツスの形である。）或は又神様に接吻したり、神像の足に接吻したりした此禮拜方法はカトリツクの教會では今日も尙行はれてゐる。聖水を用ひる方法、神聖な物及神像に接吻する方法と共に行はれてゐる。此聖水を盛る

第三十七圖　アヅテヤクの王彫

器はよく貝の形に造られ、又天使が貝を捧げてゐるやうな形の物もある。

第二十圖は兩方ともヒンヅウの女神マヤデヴア像であつて、二つの表現方法は多少異つてゐる。ヨニの神聖なる像は見方を注意して貰ひたい。右の方に上下兩端の尖つた楕圓形で殆ど寫實的に表現されてゐるし、左の方は更に象徴的なダイヤモンド型の菱形で表現されてゐる。

第二十一圖の中、上方の繪は、印度ボンベイ廳内に在るジュンナー洞窟の中の古代の卒塔婆から發見した『生命の門』の繪である。



第三十八圖　サンドウイツチ島のマオリの窓

又下の方はホールスが自分のお母さんアイシスを禮拜してゐる圖であるが、此のお母さんは面骨にヨニ其物で表現されてゐる。（多くの繪では母が婉曲に菱形で表はされてゐる。）兎も角二つ共、『生命の門』即ちヨニの表象であること丈は間違ひが無い。

近代の教會に於ては此等の形を（"Vesica Piscis"）魚の膀胱なりとして說明してゐるしかし之は特に、キリストの像、マリヤの像又は其他の聖徒の像を包む楕圓形の背光を說明する場合にのみ限られてゐること勿論である。彼等は之を魚の形、又は魚の氣

第三十九圖　壁紙の一つの模様

胞の形をとつたものであると言つてゐる。英語の魚（フィシュ）に相當する希臘語 "Xois" は『Iesus Christ Son of God, the Savior』（イエス・クリスト、神の子、救世主）に相當する希臘語の頭字を集めて造つたものである、と言ふ樣な說がある。乃でキリスト敎では魚に關する藝術が發達したのだ、と云つてゐる。又一方印度の波羅門敎では毗瑟努（ヴィシュヌ）（印度三神の一人にして維持を司る神）が世を救ふ爲に、魚に化身したと云ふやうな說もあるから玆に附記して置く。

上下兩端の尖つた楕圓形はヨニを表はす

第四十一圖　ジヴアタの「生命の本」より

第四十二圖　ジヴアタの「生命の本」より

爲に最もよく知られたシムボルである快樂を得んとする場所又は便所等の殆ど凡てにはこの楕圓形が裝飾用に用ゐられたり、落書をされたりしてゐる。子供等が最初に畫くことを覺え、そしてその何たるかを容易に諒解するのもこの形である。此形は然し、常に必然的にヨニのみを意味するわけでもない或る時は唯單に婦人の象徵となることもある。何故ならば、骨盤と臀部とが充分に發達した姿のよい婦人の身體はこの楕圓形を呈するからである。（第二

第四十三圖　ヴァタの「生命の本」より

十二圖參照）

昔の羅馬人の間では、貞操を輕んずる女卽ち娼婦は一と口に Cunnis と呼ばれたがこれは今日我々の下層社會で "Cune" と呼ばれるのと語原を等しくするものであつて墮落した女を "Kine"（裾、しも）など呼ぶのと軌を一にする。

これと同樣に古代の宗教では、婦人の代表的な特質であるヨニを、全女性のシムボルとして用ゐてゐるが古代に於ては之を淫卑な女のシムボルとして用ひずに、却つて道德堅固な婦人或は女神のシムボルとして

第四十四圖　男根の象徵

用ゐた點は注意すべきである。此例は、前揭第二十一圖に於てホーレスが彼の母を禮拜してゐるのを見てもわかる。

此形は又往々にして子宮を意味する事もある。それは此處に示された「聖なる胚胎」の繪（第二十三圖）を見れば明瞭である。此繪は一五二四年にベエニスで出版された「祝福された禱の念珠禱」と題する本から拔いたものであるが、此本は甞て嚴しき糺門に遇ひ而も遂に正本と認めらるゝに至つたものである。

次は第二十四圖であるが、之は西暦一四

第四十五圖　母神を讃刺したカルチユア

〇〇年代に畫かれ現在コロンに在るもので中世紀に、祭壇の後ろに用ゐた衝立の中の繪である。圖はマリヤとエリザベスとが會つた所で天から飛んで來た天使が二人に向つて二人とも男の子を孕んでゐることを告げてゐる。此繪に於ても兩端の尖つた楕圓形は、陰門よりは寧ろ子宮を象徴してゐるのである母人エリザベスの子宮の中にゐる聖ジョンがマリアの子宮の中にゐるイエスに對して跪づいて禮拜してゐる處は、何と面白いではないか。

イエスは言ふ『われは門なり、われは復

活なりわれは生命なり』と。第二十五圖はラフアエルとベルギノとが合作した『復活の繪』であるが、此中で、イエスは『永遠の生命』への門として畫かれてゐる。しかしこの門たるや東方印度で言ふ『生命の門』卽ちヨニを表はしたものであることは明かである。

次の第二十六圖は、病魔が赤ん坊を奪ひ去らんとする繪で、『生命の門』の中に姿を現はしたマリアに對して赤ん坊の母が祈りを捧げてゐる所である、此『生命の門』は何と寫實的ではないか。此繪は西暦一五〇〇年代にニコロ・アルンノが製作した物であると云ふ。

聖人や聖母等はよく『生命の門』の中に畫かれる。修道院や各宗派の本山等の印章、又は方々の寺々から出すメダル等の形も楕圓形のものが尠くない。私は恁ういふ印章類の押したものを澤山集めてゐるが、兩端の尖つた楕圓形及其變形、普通の楕圓形のものなどが其中で最も多い。聖牌護身符等で此形をしたものも尠くない。（第二十八圖參照）其他今日ソールト、レーク市に殘つてゐる昔のモルモン教の教會堂の平面圖は卵形である。又シエバの女王で知られたシエバの昔の寺々は孰れも平面圖が卵形であつた。イシュターの女

神の德を頌した色々のものには、最も多く此形が採用されてゐる。（第二十七圖參照）

アラビヤの南方エーメンに於ては寺院の平面圖は悉く楕圓形であるが、此等は凡てイシュターを祭りその德を頌したものであらう。處で、楕圓形と卵形であるが、是はもとより同じ形の變形であつて、双方とも同じ考へを現はしたものである。エーメン（往時のサバ）には前記の如く多くの寺院があるが、さてこの寺々でどのやうな宗教が行はれたかは今以て明瞭とはなつてゐない。アスターは彼等の日の神で、シンは月の神であつたがアスターの母は太陽そのものであつたらしい。

ラスキンは嘗て此處に掲げたダムブレーンの修道院の窓（第二十九圖參照）を指摘して之は全英蘭を通じて最も美麗なる窓であると激賞した。ところで之を第一圖の女陰の寫眞と比較して戴きたい。然すればこの窓が何を型どつたかは餘りにも明瞭である。それは正しく凡ての點に於てヨニである。大陰唇小陰唇、クリトリス前庭腔口凡ての部分が揃つてゐる。中世記の教會堂には正面玄關のアーチの要石に、全く寫實的なヨニを彫刻したもの

もあつたのである。

或時代には又、雌の駱駝か又は牝馬が死んだときに、その、ヨニが切り取られて、魔除けの爲に厩の戸口に釘付けにされたことがあつた。又同じことを幸運を呼ぶ爲に行つたこともあつた。後には成るべく卑猥に亘らぬ樣又更に婉曲に其の意を現す爲にヨニの代りに馬蹄を用ひるやうになつた。

之と同じ樣な動機からヨニのシンボルが一般の家に用ひられたり教會堂の建築に採用されたりしたのであるが、これは前述のダムブレーン修道院の例で今諒解した通りである。

さて私は次にヒンヅーのダイヤモンド形卽ち菱形のヨニのシムボルを話題に供する。之は第二十圖でマヤデデウア（女神）の股間に示されたのを我々は見たのであるが、今日のスレート屋根は此形の應用である。殊に內側の方のスレートを赤く染めたのは、ヨニの陰唇の中にある薄紅い粘膜を更に一層寫實的に表現したものではあるまいか。此樣な屋根は私の部分的な計算を基礎としても、此セントルイスの町だけで優に十萬は發見することが

出來るのである。

さて我々は次に女性崇拜の稍異つた方面を調べて見ることゝしよう。普遍的な習慣でなくても先づ大局に目を注いで調べて見やう。それは外でもない。情熱的な男が自分の交接の相手となつてゐる女を唇や舌で愛撫すると云ふことに關してゞある。此樣な唇を用ゐることはよく見る處である。エスキモーは、年柄年中寒氣の嚴しい處に住んでゐて、湯浴みをすることも身體を洗ふことも出來ないので、母親が、恰度親猫が仔猫を舐めるやうに、自分の舌で舐めて自分の子供の身體を綺麗に洗つてやると云ふことである。

第三十圖南歐羅巴に在る中世紀の建物にはザラにあるグリツホイン（註、鷲の頭と翼をもち獅子の身體をもつた怪獸）の一つである。大きな方の繪は巴里のノートルダム寺院の屋根にあるもので此種の多少形の變つたものはセントルイスのデセールス寺院の上にも見ることが出來る。

下圖はラスキンから復寫したもので、ベエニスの聖マリア寺院の屋根飾りであるとのこ

とだがヴエニスの町へ行くと此れと同じ樣なグリツフインは至る所で何百でも見ることが出來る。

女の體の凡ての部分に接吻することは、其道の研究家悉くによつて、常態的な性愛技巧であると認められてゐる。一九一四年巴里で起つた有名なカイヨー事件の裁判の時に、カイヨーがその妻に送つた手紙が證據書類として提出されたが、その中でカイヨーは『私はお前の崇むべき身體の凡ての部分に億千萬回の接吻を捧げるおゝ可愛いお前よ。私はお前のものだ……』てなことが書いてある。

印度ではLingamとヨニ、及びその二つの種々な結合が何百萬と云ふ多數の信者によつて崇拜されてゐる。シバとサクテイ、カリとの結合がその代表的なものである。主要な儀式のある時には、婦人の節操を崇める爲に、若い美くしい踊り妓、又は尼僧を素裸にして神前に捧げることゝなつてゐる。これはヨニ女神であるカリの生きた化身であると云ふことを意味するのである。この裸にされた娘の生々したヨニに對つて、坊主はいかめしい顏

をして崇拜の禮辭を捧げる。娘は神聖なシムボルをすつかりさらけ出す爲に、兩股をグツと押し擴げて祭壇の上に坐つてゐる。軈て坊主は近づいてヨニに接吻をし、それから彼は『アーガ』と呼ばれる神聖な容器（これもヨニの形をしてゐる）に入れた御供物と御造酒とを供へる。是等の供物を生々したヨニにちよつと觸れることによつて、その奉獻が濟むと、其等の供物は來會した信者一同に分配される。信者は宗教上の神聖な式としてその供物を頒けて貰ふのである。是と似た例は、メキシコではフイツツイロポクトリ神を崇める爲に供物の菓子を頒け、中世紀の歐羅巴では奉獻された陽物の形をした菓子を頒け又キリスト教の儀式では聖餐と稱して供物を頒けてゐる。

さて此儀式が濟むと讃美歌の合唱と舞妓の踊りが續くのであるが、其踊りは埃及の『腹踊り』に酷似せるものである。

斯の樣な崇拜の方法は第三十一圖のマハ、カリのを能く見ればわかる。（カリは破壞の男神シバの配偶である）彼女はベロリと舌を出して踊つてゐる。

日本の『エツド』（江戸？）の近くにヨニのシムボルである小洞があつて、其中には實に偉大であつて、而も眞に迫まる大ヨニの彫刻が安置されてをり、巡禮者は、昔と同樣今日でも必らずこのヨニを禮拜してゐる。そして此彫刻物は信心深い禮拜者の舌によつて昔から幾百千萬回となく接吻され愛撫された爲に、今はツル〳〵に擦り耗らされて磨かれた樣になつてゐる。

第三十二圖は埃及の或寺で發見された珍らしい柱であつて、ローリンソンの摸寫したものである。開いた蓮の蕾は Lingam のシムボルであり、二つの蓮の蕾は睾丸である。是等の男性のシムボルの頭は孰れもその舌が隆起してゐない。正面に（そして恐らくは裏の方にもある頭は舌も出してゐるが、その下の方にある卵形のヨニが、そも〳〵崇拜の御本尊であらうと思ふ。

アジア人種の或る者は、お客さんに行くと其家の主婦のヨニに接吻したり又は手土產をヨニに一寸觸れるさうである。それはよき待遇に對する感謝の表現であると云ふ。

第三十三圖を見よ。これは埃及の或寺に在る彫刻の圖であるが、我々はこの中に、シストラム（卽ち處女と貞節のシムボルである横木を打つたヨニ）を禮拜してゐるフータを見ることが出來る。水揚げの神と云はれるフータは手淫を行ひ、舌を出して甜める眞似をし乍らシストラムに滿腔の禮拜を捧げてゐるではないか。

シリヤには奇妙奇天烈な宗教――ネザールがある。彼等の宗教は腐亂墮落したキリスト教とアジアの性崇拜教とがゴツチヤになつた奇怪至極な混合教である。彼等は神を崇拜する。然しキリストはモハメツドの樣な單なる豫言者に過ぎなかつたと信じてゐるのである彼等は舊約全書の豫言者たちに祈り、新約全書の使徒たちに祈り、更に聖母マリアに祈禱を捧げる彼等は一夫多妻主義を實行してゐるのである。

彼等はいくつかのお祭をする。そしてその中で最も壯嚴且つ盛大なのは『子宮祭』である。此祭の日には、彼等は彼等の宗教の最も神聖且つ嚴肅な樣式を擧げる爲に、定められた禮拜の場所へと集合する。そして先づ婦人は自ら一人のこらず素裸になる。すると男たちは嚴なる敬禮を拂ひ乍ら、處ましやかに彼女等の前に跪づき、彼女等の股を抱きかゝへて、いとも敬虔且つ神妙な態度で彼女等の腹と生殖器とに接吻するのである。この仕科は各組毎に思ひ〳〵に雜然とやるのである。此樣な特異な信仰の相からして、彼等は『子宮崇拜教信者』の異名を有難く頂戴してゐるのである。

さて此處に北米アラスカから持つて來たトーテーム（北米土人の信仰の對象となるもの）の繪がある。（第三十四圖）廣く擴げた二本の脚を見て貰ひたい。是は女脚である。何故とならば、この柱にはヨニのシムボルの貼札があり、兩の脚に横から見た乳房の繪が書いてあるからである。

アラスカの美術家は唇と舌とで行ふ禮拜の方法を表現する方法を知らないと見える。乃で顏がアベコベに向けられてゐる。併し舌のある丁度ヨニの有る邊りである。顏をクルリと後ろ向きにする、この舌は丁度ヨニをペロリと甜めるのである。此トーテームの模型は市俄古の世界市にあつたが今はフィールド博物館にある筈である。

此の禮拜方法は世界的なものであると見える。何故ならば此方法は兩大陸を始め太平洋の諸島等「北は氷山寒きグリーンランドから、南は珊瑚礁連なる印度」に亦るまで、何處の國にも發見出來るからである。第三十五圖は中央亞米利加ユカタンのアツテツク寺院で發見した同じ樣な仕科の繪である。第三十六圖もアツテツク寺院のもので此繪でも蛇體を崇拜する爲に婦人も同じ樣な顏かたちをしてゐるのを見ることが出來る。

お次は同じ地方の「アツテツク、サン」即ち石に刻んだ唇であるが、第三十七圖は墨西哥はゾチカルコに在る一記念碑の一部分である。彫刻は十字形となつてゐる。此繪について或る著書が次の樣に述べてゐる。

「メキシコにある記念碑は凡て、舌を出した繪がついてゐる。それは光と熱とを此地上に齎らすことを寓意してゐる」と。

我々が更によい註釋の持ち合せが無かつたならば、或は恐らく此著者の解說を受け入れたかも知れない。然しペロリと出した舌の眞下、中央に、はつきり之がかゝれたヨニを見る以上、容易に其著者の意見に從ふわけにはゆかぬ。此處に見えるヨニは東方大陸の彫刻に見るものと同一であつて、此繪は、創造的で且つ生殖力に富む女性——而も日の神を敬ふ永遠の女性の天質たるヨニによつて、シムボライズされた處の女性——に對する男性の敬虔な崇拜の樣を現はしたものと解すべきであらう。

太洋州に於ても同じ樣な崇拜が行はれてゐる。此寫眞（第三十八圖）は極めて緻密な彫刻を施したニュージラーンドの或家の窓緣であるがオークランドで發行された或る雜誌から採つたものである。此雜誌の編輯者は、此繪の主要な所がマリオの少女だと思つた爲に不幸にして窓緣の上の方を切り取つて仕舞つたらしいが、而も此彫刻した窓緣の中には同じ樣な崇拜を雄辯に物語る資料が充分殘されてあるのである。（註、圖の中央最上部に舌がハツキリと見える）

私は嘗て第三十九圖に示した樣な壁紙を見たことがある。それは暇茶色の地に黃金の模樣を置いた高價な美くしい紙であつた。半人半羊獸首（サタイヤ）をよく見て貰ひたい。色が色だから

寫眞は殘念乍らよく見えぬかも知れぬ。乃で其模樣を白い色で塗つて大きくして見るとよくわかるのである。

「生命の本」と題する珍奇なる著書の中で、シュアタは言ふ。

「人間の形體は我々の太陽系の中で、容の美の全能力を消盡してしまふ。（第四十一圖）更に美くしき曲線、楕圓形や圓錐曲線は幾たびも幾度も繰り返される。婦人の胸――「情愛」の像身の玉座――は、そのいみじき容の美を楕圓と圓錐曲線の兩つから抽出する概觀的に考察する時は、顏及身體の正面はより人の心魂を惹きつけ、背面は人を彈く、感覺器即ち目、耳、舌、鼻及觸覺は凡て前面に配置されてゐる。」

此繪に示された如く、乳房と陰部はヴェナスによつて支配され、臀部はサタンの惡性な治下に置かれてある。

そして又臀部は、人が侮蔑の意を表はさうとする時に「此處を甜めろ」「臀喰らへ」などと云ふ程に人から嫌忌される處であることを知らなければならぬ。

「顏の各部の肉體的用途は、凡てその心的用途――或る時は社會的機關として、又或る時は戀愛を囁く機關として――の基礎の上に置かれてゐる。（第四十二圖參照）母の愛情は子供の肉體的榮養と、直接に離れ難い密接な關係を持つてゐる。性愛の諸機能、卽ち獻身、熱望、結婚と贅澤と云ふやうなものは、唇の赤い部分の量と廣さとに各の徵候を示すのである。唇は顏の何處の部分よりも一層感愛性の强い器關であつて此感覺は性愛の凡ゆる表情と最も密接な關係をもつてゐる。

「身體は其上に心が造られる處の基礎である。（第四十三圖參照）身體の機能の各區分は、その本質に於て、心の區分と軌を一にする。――そして心の區分は身體のそれに相當する部分と、行動する上に於て、最も密接なる共鳴を保つものである。頭腦の前方にある部分は、身體や手肢の前方の部分と結びつけられ、そして後方の部分は後方の部分と結びつけられてゐる。身體の上部と下部とは互ひに行動と共鳴とを繰り返してゐる。解剖學者は鼻と肛門とが互ひに關係があることを示した。又上唇は會陰と關係あり、口は生殖器（男女

共）に、舌は陰莖と陰核とに顎は陰毛に夫々密接に關係のあることを示してゐる……」

マアセリウス（西暦紀元四世紀代の人）は古代羅馬の貴族について

「誰でも途で逢つて挨拶を始めと（中略）彼等は接吻して貰ふ爲に膝や手を差し出した。」

と語つてゐる。執拗いおべつか屋は彼等の股に接吻せんと試みた。然し乍ら御主人が性急に後ろ向きになつてしまふと、接吻は股の後ろの方に注がれ、終には臀部まで注がれるやうなことが珍らしくなかつたと云ふことである。

（附錄）日本性的神分布表

左記の分布表は梅原君の早急な要求に應じて拾錄したもので、未だ逸せられてゐるものはあらうが他日補遺の機會もあらうと思ふ。兎に角この表は多少研究的に參考せらるゝ方には便益なつもりである。それは左の區別によつたからである。

現在遺れるもの

（一）×印　兩性を共に祭り又は奉納するもの。

○印　男性を主としたもの、又は奉納するもの。

▽印　女性を主としたもの、又は奉納するもの。

（二）今は存在せぬかとも思はるゝもの又は文献上には遺るもの。

因に、（二）の引用文中「一覽」とあるは「日本性崇拜一覽」、「略說」とあるは「日本性殖器崇拜略說」、「三千年」とあるは「性的神の三千年」、「P、K」とあるは、「フアルス、クルス」の略稱である。

（齋藤昌三）

東京府

▽豐多摩郡原宿町千駄ヶ谷　おまん榎（植）

×西多摩郡日向和田竹原山　女夫石

○北多摩郡立川村普濟寺　陽石

○同　郡東村上村　他國神社

○南多摩郡川口村上川口　麻羅稲荷

×下谷區谷中南禪寺　御客神

×同　不忍池辨天內　延命地藏

○同　同　聖天島　ヒゲ地藏

○淺草區山の宿教禪院　萬願地藏

▽深川區深川八幡社內　三猿

○本所區太平町龍興院內　墓碑

○京橋區築地堀越（團十郎）家庭石

神奈川縣

▽鎌倉郡鎌倉八幡宮　政子石

▽同　郡同　米町延命寺　地藏

▽同　郡江ノ島　裸辯天

▽足柄下郡湯河原　挾石

×津久井郡橋澤村　道祖神

○高座郡田名村上田名　道祖神

×中郡大磯町延台寺　虎子石

○横須賀市田浦町　吾妻神社

山梨縣

○南都留郡谷村　道祖神

○同　郡河口村　波多藝大神

○同　郡吉田町警察署隣　道祖神

○同　郡同　大雁丸家の子種石

×北都留郡鳥澤村　道祖神

▽富士山　人穴胎內窟

○中巨摩郡下高砂村廣照寺　傘地藏

×同　郡宮本村黑平の湯權現（性五ノ一）

靜岡縣

▽田方郡修善寺橫瀨八幡　玉門石

○庵原郡江尻町東泉寺　傘地藏

○榛原郡金谷町洞善寺　道樂地藏

○小笠郡河城村吉澤西福寺　麻羅地藏

○同　郡日阪村八幡宮　大松樣

○同　郡大坂村中川　鎌田の姥神

愛知縣

○豐橋市松山町　正林寺

○渥美郡田原町大久保　瘡神樣

▽同　郡同　城寶寺　御穴樣

○同　郡泉村字石神　石神

×南設樂郡鳳來寺　夫婦岩

○東賀茂郡足助町庚申堂　金勢樣

○同　郡同　官平西町足助神社　十王堂

○同　郡賀茂村桑田荻野八幡内　小祠
○西賀茂郡猿投村越戸上ノ切　磯神
○同　郡同　御船磯神
×同　郡舉母町金谷三光寺　猿像
○額田郡常磐村瀧　萬性寺　道祖神（地藏）
○幡豆郡福地村字熱池八幡
○碧海郡久沓村　氏神
○同　郡富士松村西境永福寺　子安地藏
○名古屋市南區熱田尻頭町　妙安寺
　　道祖神
○東春日井郡味岡村久保一色　田縣神社

三重縣

○桑名町鎭守　春日神社
○慶會郡內宮　子安社（山ノ神）
○同　郡田丸町在　幸神
○員辨郡藤原村藤原ヶ嶽麓　ヘノコ岩
○南牟婁郡尾鷲町　二月八月の祭典

滋賀縣

×蒲生郡樓谷村　山神祭
×栗太郡老上村田中　天狗石
×滋賀郡南滋賀村福王子神社　山ノ神樣

埼玉縣

○北足立郡白子村地福寺　石神大權現
▽同　郡吹上村大芦　齋神

▽同　郡箕田村三ツ木神社　女猿
○同　郡浦和中學西　畑中　お聖樣
▽北埼玉郡下忍村駒像村　大藏寺
　　秀衡松の三猿
○秩父郡蒔田村　椋神社祭神

群馬縣

▽邑樂郡館林觀性寺　山王權現
○佐波郡赤堀村　キマラ藥師
○高崎市烏川　山の祠
▽北甘樂郡妙義山中　陰石

長野縣

×小縣郡根津村　根津大權現

○同　郡別所村北向觀音內　男石
×同　郡殿城村瀧宮內　男石祠、女石祠
×同　郡西內村鹿教湯　笠岩神社
×松本市近在澤村　道祖神
○埴科郡松代、正月十五日の風習
○更科郡信田村字田野口　道祖神
○同　郡田口村正月十五日のドウロクジン祭
○上水內郡若槻村　雁田八幡社
×西筑摩郡木曾福島　上松の夫婦石

岐阜縣

○揖斐郡小島村　ヤマノコサマ（山神）

○ 羽島郡笠松町東　塊清大明神
○ 恵那郡大井町在　牟岩

新潟縣

○ 刈羽郡柏崎町蒼神岬　蒼神堂の傍
○ 同　石地村　雞石明神
○ 中頸城郡谷浜村在　刈田様
○ 同　郡新井町　刈田様
○ 同　郡春日村字五智　雁田神社
▽ 高田市在　淡島明神
× 西頸城郡名立町在桑取谷　雁田大明神
○ 同　郡糸魚川町字一ノ宮　天津宮子の聖權現

○ 同　郡蓮臺寺山　狐塚

富山縣

○ 新川郡大岩村日石寺　誕生石

石川縣

× 金澤市兼六公園鶴鳴島　陰陽石

福井縣

○ 大飯郡高濱町字岩神　岩神（略說六四）

千葉縣

○ 東葛飾郡千代田村字柏　石神
○ 同　郡湖北村字中峠法照院　石神
○ 印旛郡根郷村字太田　熊野神社
○ 同　郡酒々井町字午頭　天王祭

○ 同　郡六合村松虫寺　石神社
○ 同　郡木下町字別所岩井家の石神社
○ 同　郡同　村字竹袋　石神
○ 同　郡　布鎌村字中谷　石神
× 香取郡松澤村　陰陽石神
○ 同　郡小見川町小川岸の小祠
○ 同　郡飯高村字小高　天王社
○ 同　郡大倉村　稲荷社
○ 同　郡米澤村植房　かさ神様
○ 市原郡白鳥村石神の石神様
○ 君津郡久留里町延命寺　石神
○ 同　郡秋元村日渡根の小祠

茨城縣

○ 北相馬郡稲戸井村米ノ井　乙子の石神
○ 筑波郡高道祖村字高道祖
× 同　郡筑波山
○ 稲敷郡江戸崎町　石神（オマラサマ）
○ 同　郡鳩崎村字佐倉　石神
○ 同　郡木原村　石神
○ 同　郡船島村字舟子　石神
○ 同　郡奥野村字島田　道鏡様
○ 同　郡古渡村大字飯出廣畠神社　石神
○ 同　郡龍ヶ崎町　皇靈大明神
○ 新治郡佐賀村字志戸崎　道鏡様

○同　郡安飾村字安食　道鏡樣
○同　郡竹原村石神　道鏡祠
×同　郡[illegible]村加波山頂　金勢石
○行方郡玉川村字井上　石棍樣
○同　郡行方村字竹下　道鏡樣
○同　郡平賀村字船津　道鏡樣
○同　郡麻生村字麻生　石神
○同　郡大和村字岡　道鏡大明神
×同　郡同　村字藏川御船神社の五月神事
○鹿島郡鹿島神宮內　要石
×同　郡中島村鳥栖神社　男瓶女瓶

○東茨城郡酒門村　地藏堂
○同　郡澤山村字河野澤
○同　郡竹原村字竹原　道鏡社
▽西茨城郡七會村字鹽子　大開觀音
○那珂郡額田村字額田の小祠
○久慈郡天下野村字柿町　庚申塔
▽多賀郡高萩村字高戸の女岩

栃木縣

×足利市本町、及び綠町兩天王の御幣合せ
○同　市鑁阿寺　陽石
×足利郡三重村字五十部　水使神社

○上都賀郡足尾町字御子　陽石
×同　郡庚申山　陰陽石
○同　郡大澤海鞍掛山　道祖神
○同　郡日光町湯元の西北金精峠　金勢神
○下都賀郡野木村一月十四日の風習
○鹽谷郡鹽原溫泉福渡戸　子抱石
○宇都宮市曲師町金毘羅神社內　コンセキ樣
○河內郡城山村字松原　金勢樣
○同　郡藥師寺村　道鏡樣
○那須郡黑羽町鎭國八幡社　陽石

福島縣

×北會津郡養蠶町第一小學校前　石鉢稻荷
×南會津郡二川村字白岩　大川の陰陽石
▽信夫郡信夫山羽黑神社　正月祭
○同　郡松川村字石合　女泣石
▽同　郡岡山村大字山口字女形　女形石
○同　郡佐倉村字下村の家屋落成式風習
○西白河郡甲子溫泉
○石城郡窪田村字四澤　淡島神社

宮城縣

○名取郡愛島村　笠島神社

○ 同　郡同村　下幸神社
▽ 同　郡玉浦村大字蒲崎濱
港神社の大椿木
× 玉造郡鳴子　道祖神
○ 同　郡同　法華寺入口　陽形神
○ 遠田郡田尻町　道祖神
○ 仙臺市八幡町八幡社　道祖神

岩手縣

× 西磐井郡眞瀧村　小祠
○ 同　郡一般の戸口の魔除（略說九九）
× 膽澤郡衣川村三峰神社　陰陽石
○ 氣仙郡唐丹村御崎神社　幸神
▽ 同　郡今泉郡　產形觀音
× 同　郡矢部村　陽神陰神岩
○ 和賀郡黑澤尻町諏訪神社　道祖神
○ 同　郡二子村白鳥　金勢樣
○ 同　郡小山田村　道祖神（村內多數にあり）
○ 同　郡湯田村　金勢樣
○ 稗貫郡花卷町鎚幣稻荷　道祖神
○ 同　郡湯口村大澤溫泉　陽石
○ 同　郡太田村觀音堂內　駒形堂
○ 上閉伊郡綾織村　駒形明神
○ 同　郡同　村月山神社　金勢樣

× 同　郡同　村光明寺　陰陽石
× 同　郡遠野町地方の雨風祭
○ 同　郡附馬牛村字荒川　駒形明神
○ 同　郡上鄕村大字板澤　駒形堂
○ 同　郡鱒澤村字迷岡　駒形堂
○ 同　郡大槌村字小槌　金勢大明神
▽ 盛岡市松尾下山陰の淡島明神
○ 岩手郡菱川村　山ノ神
○ 同　郡東中野村　智和氣神社
○ 同　郡卷堀村　卷堀神社
○ 二戸郡福岡町　陽神

青森縣

○ 三戸郡岡山村　金勢神
○ 同　郡八戸町西南白山頂上　荒神樣
○ 同　郡五戸町字澤　石神
○ 同　郡同　町字愛宕町　金勢樣
○ 南津輕郡碇ヶ關　金勢大明神
○ 青森市諏訪神社境內　猿田彥神
○ 下北郡脇野澤村海中の立石

山形縣

○ 南置賜郡五色溫泉　抱石
○ 西田川郡溫海溫泉　熊野神社
○ 同　郡大山町　寒神祭
○ 同　郡蔡坪　立石

○ 飽海郡高瀬村　山の神
○ 同　郡遊佐地方の嫁つぎ
○ 同　郡庄内地方の道祖神祭
○ 同　郡酒田町道祖神祭の風習

秋田縣

× 雄勝郡三津川村
○ 同　郡相河の庄
× 仙北郡一般の塞神、陰陽石、道祖神、船戸神
× 同　郡境驛　唐松神社
○ 秋田地方正月十五日の行事
○ 北秋田郡川口村　コーセンサマ
○ 鹿角郡松木村　陽石神祠

北海道

○ 後志島牧郡西島牧村千走　陽形神

京都府

× 宇治郡山科町字大宅字中小路　岩屋神社
○ 京都市寺町今出川　出雲路幸神
○ 同　市五條　道祖神
○ 同　市立寶宮大通西　お岩樣
○ 葛野郡下嵯峨材木町車折社　陽石
× 紀伊郡伏見町字木挽町寶福寺　女夫石
○ 中郡吉原村字新治　金精

奈良縣

× 奈良市春日社内　水谷神社
▽ 同　市東大寺三月堂　大黑
▽ 同　市瑾城寺　裸形佛
▽ 同　市三笠山麓　熊野神社
× 磯城郡綱向村字江包　綱掛神社
× 同郡織田村字芝村クニツサン境内　陰陽石
○ 北葛城郡當麻寺庚申堂　猿像
× 同　郡當麻村　陰陽和合地藏
▽ 字陀郡山粕より桃股の峠道　陰石
× (郡村名を逸す)　天道羅石山

和歌山縣

× 東牟婁郡熊野山上流　陰陽石
○ 和歌山市吹上寺　本居太平墓
▽ 同　市近在　山王權現
○ 同　市新堀町神明社の子持石

大阪府

○ 南河内郡志紀村字弓削　笠マラ大明神
▽ 同　郡八尾町東北　穴太大明神
○ 大阪市　住吉神社
○ 同　市生玉社　金山彦神社
○ 同　市今宮　十日戎

兵庫縣

○尼ヶ崎市大物大樋現の社
▽有馬郡有馬温泉　三和社
×津名郡中村山頂　葛籠石
▽明石郡垂水村西垂水海神社　陰石
×同　郡神出山
▽加西郡西在田村字釜坂　メツコ岩
○姫路市五軒町六一　陽神
×揖保郡　明神岩
○多可郡黒田庄村黒田龍尾神社
ワカオエの尊
▽同　郡比延庄村比延大次神社　陰石
○美方郡浜坂町婚姻風習

鳥取縣

▽鳥取市外丸山　オソヽ岩
○氣高郡美穂村字下味野　オモガイ
○西伯郡大山村字赤松　荒神講
×同　郡法勝寺村字福瀬　正月の注連縄
○同　郡同村地方の　幸ノ神祭
×伯耆西部地方正月の風習（郷土趣味十八）

島根縣

×八束郡古浦の陰陽石
○同　郡大庭村字佐草　八重垣神社
○能義郡荒島村字百久保　劍御崎神社

○鎌川郡四羅村字大塚　魔羅神
▽同　郡追名崎　故郷石
○同　郡久村華藏寺　金勢堂
○周吉郡中村字西村の正月初午午頭天王祭

同山縣

×邑久郡朝日村犬島　陰陽石
○上道郡富山村曹源寺内　小祠
○兒島郡彦崎驛　金眞羅明神
○同　郡郷内村林　金勢大明神（建築上に現はれしもの）
×岡山市岡山後樂園内　陰陽石
○都窪郡中洲村字酒津　カナマラ様
○川上郡落合村最上稲荷社内瘡守祠陽石
○小田郡笠岡町の西二里　陽石
○久米郡倭文西村油木　岩瀧神社
○同　郡龍山村字中級の小社
○苫田郡大野村字土居　オホヒトサマ
○英田郡弓削村字弓削　弓削祠
○御津郡牧石村金山妙見山頂　陽石

廣島縣

×沼隈郡高須村今津　陰陽石
×同　郡松永町高諸神社　陰陽石
×佐伯郡嚴島町道祖神社　陰陽石

山口縣

○ 郡濃郡富田村字川崎　川崎觀音の御影
○ 大津郡俵山溫泉　マラ神社

香川縣

○ 大川郡前山村青木山頂　女體山（石根）

愛媛縣

○ 越智郡大三島弓削村アナバサン（穴場）
○ 今治市吹揚神社　穴波神
○ 宇和島市外並松　金勢神
▽ 同　市地方の火の呪
× 西宇和郡八幡濱町　夫婦石

徳島縣

○ 徳島市佐古大谷三島神社　七島七化の陽石
× 名東郡鮎喰川の陰陽石
○ 勝浦郡生比奈村星ヶ谷　陽石
○ 麻植郡西尾村松井家裏　金勢神
× 同　郡山瀬驛山上　交合神社
○ 阿波郡東村　宇藏太夫の陽石
× 三好郡三庄村　お花大權現

高知縣

▽ 長岡郡介良村朝峰神社　陰石
○ 幡多郡清松村字松尾の結婚風習（P、K一）

福岡縣

○ 福岡市博多承天寺　陽石
▽ 筑紫郡太宰府附近　石穴神社
× 糸島郡深江村八幡社　陰陽石
○ 久留米市　道祖神（奉納物）
○ 三潴郡大善寺村宮本　道祖神
○ 八女郡笠原村靈岩寺　陽石

大分縣

○ 宇佐郡宇佐八幡下宮　道祖祠
○ 同　同　末社　三女神社
○ 日田郡五和村大字石井字河野　キノオ様
○ 北海部郡野津　屁の子地藏

宮崎縣

○ 南那珂郡油津町梅ヶ濱　陽石
× 西諸縣郡小林町字東眞方岩瀬川　陰陽石

佐賀縣

○ 三養基郡田代村字太田安生庵　マタギ石

長崎縣

○ 西彼杵郡矢上村歳之神橋　歳德様
○ 長崎市附近　三吉大明神
○ 北高來郡有喜村字鶴岡墓地のリンガ

○ 北松浦郡稗田在　綾岡神社

熊本縣

× 玉名郡木ノ葉村　木ノ葉猿

○ 鹿木郡内田村　カサジメサン

▽ 同　郡菱形村　穴八幡

× 菊池郡迫邊　夫婦石

○ 熊本市木妙寺内

○ 飽託郡龍田村字弓削　法王様

× 天草郡志岐村字上津深江　塞の神

鹿兒島縣

○ 肝屬郡垂水村字田ノ神　石神社

▽ 蛤良郡西國分村字宮内　鹿兒島神宮内

○ 大隅地方一月十五日のハラメツツ（風習）

沖繩縣

× 國頭郡瀬長島　陰陽石

○ 中頭郡普天間宮

× 首里市の西北郊　末宮

▽ 琉球の墓穴

▽ 八重山群島武富島の晴れを祈る風習

（二）文献上に遺るもの

東京府

高輪南町石神社（郷土趣味四ノ二）

廉布山崎家邸内陰陽石（略說、兎園小說十二）

淺草觀音境内の歳市（略記五一）

同　聖天山　陰木（三千年）

小石川第六天平田邸内　金勢神（S、J、P一八）

同　龍閑寺（淨土宗）木隅（一覽二）

麴町區飯田町中坂上　金勢神（同）

牛込築土八幡社庚申塔（同三）

豐多摩郡大久保町一八二　道祖神（同）

鶴戸町正月十四日行事（雷燈錄、略說一一一）

同　町平田邸　金勢神

上目黑日向北野天神社（略記七五）

同　權現臺發見土偶（土の香四）

染井墓地舊藤堂家下屋敷仙人臺前の行者（郷土趣味三ノ五）

下練馬の石神井（石神問答）

北豐島郡新里村毛長明神及舍人村の社（雷燈錄）

同　西ケ原貝塚發見土偶（土の香四）

同　王子　王子稲荷　お石様

北多摩郡狛江村　石神

同　東村山村久米川熊野神社附近の小祠（P、K一）

同　府中六所明神の閻祭（土俗私考）

西多摩郡小宮村字養澤　門客神
南多摩郡恩方村案下　門松燒（P、K一三）
北埼玉郡忍村駒像大藏寺　猿像
芝愛宕神社の御使ひ祭　東京風俗志）

神奈川縣

橘樹郡生見尾村杉山神社　田植祭
鎌倉郡鎌倉小町本覺寺　祇園明神
高座郡久所村八幡神社　ババ石（無花果）
中郡上秦野村堀　道祖神（三千年）
同　郡南秦野村今泉　岐神（一覽七）
足柄下郡箱根山石地藏前　陽石
同　郡湯河原節分（三千年）

津久井郡内郷村奥畑寶壽庵前道祖神（一覽八）
同　郡三ヶ木村新宿　道祖神（同）
同　郡石老山奥院　チンボク杉（相州内郷村話）
この外、津久井郡内には頗る多い。詳しくは（資料一覽一〇頁）を見よ。
高座、愛甲郡地方の跳火、酒造家の捻り餅（三千年）

山梨縣

南都留郡谷村の道祖神祭（人類學雜誌二〇八）
北都留郡笹子村道祖神（一覽）

同　郡上野原町在松留養蠶祠（三千年）
同　郡丹波山村　道祖神（同）
同　郡田通の姨神（北都留郡志）
同　郡桐原村のおば神（同）
東八代郡國立村田中村の間、金山明神（略說七二）
同　郡御代咲村大ボラ山麓アラマキ道祖神（同）
甲府市鍛冶町鍛冶職某方金山明神（同七三）
中巨摩郡御嶽山の道祖神（一覽一四）
同　郡同　村金樓神社猫坂峠の小祠（土の香四）
北巨摩郡山間の石祠＝女陰を祀る（日本風俗志中）
同　鹽崎村字金剛地組金山神社（性五ノ一）

靜岡縣

田方郡伊東の尻摘み祭（三千年）
賀茂郡伊波比咩命神社（伊豆志）
駿東郡御殿場農家新築祝（性五ノ一）
同　郡沼津町丸子神社内女男神社（郷土趣味三ノ六）
富士郡大宮町正月十四日夜賽神祭（人類學雜誌六〇）
庵原郡興津町由井ヶ濱由井神社夏祭（郷土

趣味十二）

阿倍郡服織村羽鳥洞慶院の開山忌（郷土趣味二十三）

同　郡川邊松龍院福壽地藏（土の鈴十五）

同　郡丸子緣結地藏（同十七）

同　郡藁科川開運石（甲子夜話、好色讃家圖會）

同　郡大坂村字新川の姥神（郷土研究一一〇）

盤田郡三川村友永廣斗宮緣日　郷土趣味五ノ六）

同　郡田原村三箇野坂の甑山P、K一三）

小笠郡掛川在孕石村はらみ石天神（共古隨筆一〇三）

愛知縣

寶飯郡豐川町最明寺馬方辨財天（P、K九）

同　郡御油町疱瘡神（略說七二）

同　郡大塚村赤根の瘡神（性五ノ一）

同　郡御津村大字御馬字梅山參番引馬神社の神幸祭一覽二二）

東賀茂郡足助町足助神社南隣の八幡宮（性五ノ一）

同　郡同川面妻の神（同）

同　郡同反田妻の神（同）

知多郡木田雨尾山觀福寺（土の鈴十三）

名古屋市熱田神宮五社の行（日本風俗志中）

愛知郡常盤村岩塚七郷社祚コサ祭（民族と歴史八ノ三）

丹羽郡羽黑村大宮淺間神社の祭事（P、K八）

海東郡黃目寺村觀音寺　オサルサマ（略說二九）

三重縣

度會郡外宮末社神宮落神社（伊勢參宮名所圖會　略說一〇三）

同　郡東二見村　猿田彦石、猿田姫石（三千年）

同　郡朝熊山登山路傍　幸ノ神（同）

阿山郡T村Y部落の山神祭　民族一ノ三）

河藝郡飯野村字寺家熊野宮　天地藏（三千年）

宇治山田市常明寺祭事の餞撒き（藝文八ノ一〇）

滋賀縣

坂田郡筑摩祭り（郷土研究一ノ七）

犬上郡多賀神社（多賀大社由緒略記）

大津市松本町精太明神（郷土趣味三ノ六）

埼玉縣

北足立郡神根村石神お女郎佛（郷土趣味三ノ六、三ノ八）

入間郡勝樂寺村字城山諏訪明神の神體（信友隨筆）

同　郡飯能地方の結婚風俗（P、K一）
北埼玉郡佐間村　麻羅祭（略說九九、鄕土趣味一〇）
秩父郡日野村棒の神の小石詞（信友隨筆）
同　郡石神神龍寺境內石神社（同）
兒玉郡地方農家の氏神（中央史壇十ノ五、六）

群馬縣

山田郡大間々町在道祖神（三千年）
北甘樂郡薩木村夫婦石（一覽四一）
同　郡妙義山麓茶店の床下　鄕土趣味六）
碓井郡九十九村下增田　寶藏寺（一覽四一）
群馬郡室田村長光寺山王祭

上野地方正月十五日の行事（古今要覽稿五一）

長野縣

南佐久郡川上地方正月行事（鄕土研究四ノ四）
小縣郡神川村上堀　道祖神（一覽四三）
松本市桐寺の道祖神（P、K二）
埴科郡松代正月の風習　略說一〇七）
更科郡信田村田野口道祖神（略說一〇八）
同　郡稻荷山町正月十五日の左義長（鄕土趣味四ノ六）
上水內郡地方正月十五日夕の注連燒き（風俗畫報二二四、略說一〇八）
同　郡戶隱村字寶光社赤地藏の笹祭（性五ノ一）
長野市善光寺十二月御餅搗（栗里先生雜著三卷）
下高井郡秋山村の正月風習（東遊記）
西筑摩郡末川村地溲澤の地溲祭（木曾路名所圖繪三）
下伊那郡且開村字島田正月十五日田遊神事（日本民族志）
同郡三穗村字立石　貴船神社巨杉（同上）

岐阜縣

吉城郡坂下村字鹽屋金精神（雙太後風土記十三、略說六六）
同　郡小島鄕小無雁村　男莖形神（同上）
同郡下高原鄕村々の嫁祝（同書十六）
大野郡白川村の奧部落の道祖神祭（國民新聞一二四一）
同　郡灘鄕片野村　日吉社の末社　男莖形神（雙太後風土記一）

新潟縣

南蒲原郡本成寺村字月岡の奇習（越後三條南鄕談）
北魚沼郡藪神の庄堀之內村　股倉神社（溫古の栞二三號）
同　郡地方正月十三日花水の神事（北越雪

(譚)

同郡上條村字西名七夕神社（温古の栞、郷土趣味三ノ六）

同　郡女堂村二石嶽社（越後國式外神社考）

南魚沼郡東村字荒金桐澤間のサイノ神坂の小石詞（一覽五　）

佐渡郡新穂村東光院子の權現（三千年）

富山縣

婦負郡鵜坂村　卵坂神社祭事（三千年）

石川縣

羽咋郡河合村字上河合　陽神（略說六四）

同　郡一ノ宮村氣多神社（風俗畫報三六二）

河北郡卯辰山五本松陽神（略說六四）

福井縣

敦賀郡松原村字齊見信露彦神社（日本風俗志敦賀郡志）

千葉縣

長生郡豐榮村正月十九日嫁見の式（風俗畫報二二四、略說一二〇）

同　郡萩原町字三角、帝神社（性五ノ一）

茨城縣

鹿島神宮の帶祭（三千年）

栃木縣

上都賀郡日光町の陽石（略說六八）

同　郡同　町神橋の西蛸荷社內（同上）

同　郡同　町廟內開山堂の陰陽石（日光山志二、略說六八）

福島縣

南會津郡檜木畝村邊の防火の呪（無花果）

大沼郡高田村伊佐須美大明神社（會津風土記）

信夫郡八丁目新建民家屋裏の陰石（白石先生神書八）

西白河郡五箇村　雙石明神社

田村郡片曾根村字井引羽山神社十一月の祭典（風俗畫報、一五二、略說九八）

安積郡郡山町赤石神社（三千年）

河沼郡野澤町南二里山の神の祭日（崇拜史）

宮城縣

仙臺市大念寺道祖神（一覽七四）

同　市正月十五日夜の風習（略說一二〇）

同　市十二月節季候（一覽七四）

宮城郡愛子村道祖神（同上）

同　郡大澤の定義如來（土俗資料七）

同　郡同　村鹽竈神社　奥羽觀蹟聞老志七上）

同　郡黑川村小兒百日咳兇（略說九三）

登米郡米谷村鹿島神社子持杉（封內風土記十五）

岩手縣

西磐井郡一ノ關町道祖神（三千年）
膽澤郡水澤町高見神社內（一覽七六）
同　郡前澤町民家の祀神（同上）
上閉伊郡釜石町澤村遊廓の奥、高神澤の麓
神樣（土の鈴十五）

青森縣

下北郡田名部附近田屋村山中天魔神の祠（眞澄遊覽記「奥のうらうら」）
東津輕郡碇ヶ關村　金勢大明神

山形縣

西田川郡溫海附近路傍の陽形（東遊記）

秋田縣

雄勝郡下關村佐倍の加美坂。逆卷村山本。惡戸村。外野目村。中泊村西方一里塚の下、宮田村關口越山中。宇宙院內　高松莊。八向ヶ村（以上一覽八六）
平鹿郡梨木場村。石成村。鞍馬村道祖神山源太左馬村道祖神。小豆田村道祖神、下田村道祖神。福島村道祖神。（同上）朝倉村八幡天王社金勢神。十文字村金勢神
淺舞町金勢神（以上三千年）
仙北郡大曲町壹館街燒蔓橋の衢船戸神社內
長野村金生明神社。國見村（同八七、八八）

秋田市一月十四日鎭倉のホクキ棒（鄕土趣味三ノ一二）
南秋田郡男鹿島南磯女川村字堂下地藏院の子安地藏（大日本名勝圖繪）

北海道

アイヌ人津浪を防ぐ呪（無花果）
アイヌ人防火の呪（同上）

京都府

宇治郡宇治離宮（雍州府志三）
京都市高辻繁昌社（鄕土趣味三ノ一）
同　市婚禮床盃の重箱（風俗畫報一五二）
愛宕郡岩倉　尻叩祭（滑稽雜談十七）
葛野郡梅宮マタギ石（山城四季物語二）
紀伊郡伏見稻荷社（略記三七）
久世郡宇治　縣神社祭（鄕土趣味十二）
南桑田郡篠村　粟島神社（一覽九六、三千年）
同　郡稗田野村　稗田野神社（口丹波口碑集一〇、一六二）
加佐郡青葉山青葉神社（同神社略誌）

奈良縣

高市郡八木地方の農家の風習（P、K二）
宇陀郡御杖村字神末　姫岩明神（奈良二十八）

和歌山縣

東牟婁郡本宮村熊野權現（一覽九九）

西牟婁郡田邊町地方のいはひそ（日本風俗志下）
海草郡加太淡島明神（略說三）
同　郡有本村日吉神社の瓦猿（風俗畫報三七九）

大阪府

堺市高須の民家屋根瓦の猿像（略說二八）
北河內郡川越村附近の婚姻風習　（鄕土研究二ノ一二）
大阪市天王寺愛染堂　陽石（略說六三）
同　市堀江遊廓年末餅搗（略說一　四）
三島郡淸水村　笠森稻荷　土俗資料

兵庫縣

武庫郡鳴尾村大字小松岡太神社（日本民俗志）
同　郡西宮町八馬樓內　陽神（三千年）
有馬郡高平村木器の小祠（略說六三）
同　郡藍本莊の夫婦岩（播陽群談十七）
津名郡多賀村神尾伊弉諾神社の捕（鄕土光華號）
三原郡オノコロ島（三千年
飾磨郡道辻社　播州名勝巡覽圖會）
印南郡阿彌陀村字生石　生子神社（三千年）

鳥取縣

西伯郡淀江の正月荒神祭（民族と歷史六ノ三）
八頭郡國英村字片山靈石山神ノ御子石（三千年）

島根縣

八束郡乃木村字乃白、野白神社（鄕土趣味三ノ六）
同　郡大庭字佐原　狹井神社（三千年）
能義郡松井村道祖神（懷橋淡上、略說一一九）
周吉郡元谷村月日の神（隱州視聽合紀二）

岡山縣

赤磐郡西高月村牟佐高藏神社報賽新嘗の祭り（栗里先生雜著三、略說七）
同　郡潟瀨村字南方　金剛童子社（備陽誌集成）
備前の荒神樣（民族と歷史六ノ五）
淺口郡玉島町小祠（一覽一一五）
後月郡明治村字稙、八幡神の祭（三千年）

香川縣

木田郡牟禮村八栗山、聖天岩屋の歡喜天（土俗資料二）
讃岐地方節分の金マラ（一覽一一八）
同　婚禮のハナツキメシ（略說四）

愛媛縣

上浮穴郡中田渡ボヾ八幡（民族と歷史九ノ六）

北宇和郡日振島　夏の祭事（略說五九）

徳島縣

徳島市通町二丁目事代主神社金馬羅（郷土趣味二十四）

同　市新町橋筋天滿宮陰石（同上

名東郡地方婚禮の風習（民族二ノ三）

那賀郡宮濱村東尾山神々社（郷土趣味二十四）

同　郡西路見村青島の栗島神社（同上）

同　郡羽ノ浦村字中庄　穴觀音（同四十六）

板野郡里浦あま塚（同上

名西郡下分上村字左右內麻唐山燒山寺（同上）

美馬郡半田村字久保地藏寺御安御前（同上）

福岡縣

京都郡西犀川村木山生立八幡宮夜市（民族と歴史八ノ六、筑紫野民譚集）

福岡市西町邊の惡疫除（筑前志）

筑紫郡水城村字國分　塞の神（筑前志）

山門郡清水村字山門（三千年）

早良郡原村荒江　塞の神（同上）

福岡市外比惠の山王の猿（變態資料三ノ二）

大分縣

日田郡有田村小寒水、腰折地藏（郷土趣味十九）

同　郡夜明村貧乏々（同十二）

同　郡五馬媛社のカタゲ市（筑紫野民譚集）

北海部郡臼杵町附近の祭禮（郷土趣味十二）

熊本縣

阿蘇郡阿蘇神社年神社田作神事（肥後國志）

同　郡村上村年ノ神（南郷事蹟考）

天草郡花蘇の尻たゝき（民族二ノ三）

鹿兒島縣

鹿兒島市清水町清井家　塞神（三千年）

同　市稻荷町市來家　塞神（同上）

同　市附近村落のハラメン棒（民族二ノ二）

沖繩縣

首里市城南の識名宮（科學知識五ノ三）

琉球の大祭（日本民俗志）

伊平屋列島の嗣曳（民族二ノ四）

現代邦譯艶書解說史

——（附、最近珍書秘畫輸入往來）——

我國に輸入された珍書秘畫に關する根本的な紹介、即ち、數百年來の歴史を玆に一々紹介するなんてことは到底僕等の畑とする所ではない。明治初年以後の紹介なら何とかこぢつけられないこともあるまいが、到底この限られた紙數では書き盡せない。

故に僕は、最近、即ち震災を一區切として既往六ヶ年間に亘る現在迄に、一體どれだけの珍書秘畫が輸入されてゐるか？　そして、それ等は一體如何なる種類の珍書であるか？この問題のみに就いて、ザット一通り調べて見るだけにする。

この六ヶ年中に約五百種の珍書と、約六拾種の秘畫集とが輸入されてゐる。尤も此れは僕だけが知る範圍の數で、嚴密な調査ではない。又實際それは誰人にしろ極めて至難に屬する問題だと考へる。此等の種類は、色んな人達が直接外國から持ち歸つたもの、或は、直接諸外國の出版元より注文して取寄せたものが多い。丸善その他の直輸入書肆で賣捌いたものなんて全く物の數でない。

そこで、直接持ち歸つたものにしろ、直接に注文して得たものにしろ、輸入されたと云

ふ意味に於ては少しも變りはない。此等のうちで、震災後既に飜譯されて日本語の活字本になつてゐるものも數拾種はある。

カーマ・スートラ（愛經）

先づ以つて第一が、震災直後、卽ち大正十二年十月十五日、京都大谷大學內印度學會發行に屬する泉芳璟教授譯の「カーマ・スートラ（愛經）」が其れである。（尤も、この十月十五日發行と云ふのは奧附だけの問題で、實際は震災直前に發行されたもので、發禁をくつたが震災のドサクサ紛れに大した事件にもならずに事濟みとなつたものである）

一體、この「カーマ・スートラ」は、その遙か昔に於て諸外國語に譯出され盡してゐる筈で僕の手に入れたものだけでも左の七種がある。

（1）Bhagvanlal Indraji 氏譯の The Kama Sutra of Vatsyayana と云ふ英譯本（1883年 Hindo Kama Shastra Society 版。8ポ，198 page もの）

（2）Isidore Liseux 氏譯の Manuel d'érotogie hindoue rédigé en sanskrit vers le Ve siécle de l'ére chrétienne. これは英譯より佛譯にした重譯ものである。（1885年，巴里の私的出版，8ポ，275 page）

（3）L. Lamairetse 氏譯の Le Kama Soutra. Régles de l'amour de vatsyayana と云ふ佛譯本（1891年，巴里の私的出版）

（4）Richard Schmidt 氏譯の Kama Sutra, die Indische Ars Amatoria, mit Yaśodhara's Commentar:（1897年，8ポ，493 page. 獨譯）この再版が昨年來，（Das Kamasastrum des Vatsyayana. と云ふ題名になつて，さかんに輸入されてゐるが，現在日本內地での入手は一寸困難かも知れない。）

（5）K. Rangaswami Iyengar 氏譯の The Kama-Sutra (or the science of love) of Sri Vatsyayana と云ふ印度人の英譯で 1921年，印度の Lahore より出版。）

（6）昨年，巴里から英譯が出た。日本でも手に入れた人が指數名あるが，現在，英米に

於てはかんにもてはやされてゐるやうだ。即して
The Kama Sutra of Vatsyayana. (Love precepts of the Brahmans) と云ふ巻頭
歯たち切りのフランス限定の安本である。(ラフラン, 224page, Librairie "Asira"
12,rue Chabrol, paris xe.)

(7) それに今一つの安本は, 巴里キュリー社發行の Les Kama-outra de Vatsyayana.
で, 現在1冊20圓も出せば, 直ぐにもフランスから發送される限定本である。

大體、以上の七種であるが、泉氏の邦譯した「カーマ・スートラ」は一八九一年ボンベイのニルヤサーガラで出版されたドウルガーブラサーダ氏の梵語よりの直接譯で、今後如何なるカーマ・スートラの邦譯が出やうと、恐らく此れ以上完全なものはなからうと思ふ。

序ながら一言して置くが、日本にカーマ・スートラを邦譯紹介した最初は、大隅爲三氏で、これは大正四年七月、ラメレーズの佛譯から重譯した私的出版である。(四六版總皮裝幀、本文二度刷、四三五頁。)泉氏の後では、吾が酒井潔が、雜誌變態資料(大正十五年十月創刊より以下四號)及び雜誌文藝市場(昭和二年九、十合本號)中に於て、泉、大隅兩氏の譯文その他のリズー氏の佛譯を中心に四五種を對照して、詳細に亘る解說を試みてゐる。又、大正十三年五月八日、東京麻布笄町印度文學研究會から柴田茂と云ふ人の發行で、本書の抄譯本が出てゐる。性交篇と奥義篇が全滅と云つてい〻程の削除で、之れは泉師本を翻案したものである。

○第一品　總說篇

——(第一章)全卷總說——(第二章)三勢力を得ること——(第三章)性愛の學及びそれに關係せる學藝——(第四章)市民の生活——(第五章)愛人とその媒介——

○第二品

——(第一章)　の考察——(第二章)抱擁——(第三章)接吻の種々——(第四章)爪の搔傷——(第五章)齒の咬傷——(第六章)　の様態と變態の種々——(第七章)打擊と叫聲——(第八章)擬男　　の準備——(第九章)口唇に於ての　——(第十章)　の用意

と愛の囁——

○第三品　少女親近篇

——（第一章）少女の選擇と親族の決定——（第二章）少女の信頼を得ること——（第三章）幼時より少女の心を得ること——（第四章）媒介者なくして男女が相接近すること等——（第五章）結婚の種々——

○第四品　妻女篇

——（第一章）妻の義務等——（第二章）年長妻の義務等——

○第五品　他妻親近篇

——（第一章）他妻に對する關係——（第二章）昵近と愛を得ること——（第三章）女の心を試みること——（第四章）仲媒者のなすべきこと——（第五章）貴族の戀愛事件——（第六章）後宮の婦人とその保護——

○第六品　娼婦篇

——（第一章）娼婦の求むる男子——（第二章）　喜ばしめること——（第三章）情人より金錢を引出す方法——（第四章）捨てし情人と和解すること——（第五章）種々異つた利益の考察——（第六章）情人を決定し得ざる場合の考察——

○第七品　奥義篇

——（第一章）美貌、魅惑、精力保全法——（第二章）精力回復、　法等——　以上

泉芳璟氏本（四六版、鼠絹クロース裝幀、三三二頁、正誤表（活字印刷）及び、半紙二ッ折日本紙四○頁の廣告刷、伏字挿入表附き、後ち、伏字に活字刷となる）——大正十二年九月禁止。

所が、先日、赤坂の印度文學研究會と云ふところから、（**ヴツチヤーヤナの性愛學**）印度古典**愛經**（**カーマ・スートラ**）の頒布廣告が現れた。恐らく泉師本、大隅氏本を主にしたものであらうが、該書の專賣規定に依れば會費送料共參圓九拾八錢で、製本出來期日が昭和三年十二月中旬とあるから、もう配本濟みになつてゐると思ふ。發禁になつたか否やは不明。（四年一月十日現在）若し、完全に出版されたとすれば、これで同書の邦譯が四

種類出來た譯である。

デカメロン（十日物語）

ボツカツチヨのデカメロンに就いては、今更ら茲にあらたまつて述べるも野暮なほど、昔から輸入されてゐる。ボツカツチヨと云ふ名が始めて日本に知られたのは明治三年出版の「西洋易知錄」と云ふ飜譯書に現れたのが其れでこの書の卷四の下に、ボツカツチヨは西曆一千三百十三年にフロレンスに生れ、詩よりも文章が巧みで其著デカメロンと云ふ小說の如きは一百條の物語を集めた面白い書である――と云ふやうな紹介が出てゐる。が、日本にデカメロンの飜譯が出た最初は明治十五年六月大久保勘三郎氏の譯した「歐洲情譚群芳綺話」であらう。カストルの佛譯を底本とした抄譯もので初編は第一「月下氷人媒ニ介ス奇緣ヲ」、第二「墓生徒ノ記ニ死佳人ヲ」、第三「痴僧不ル知ラ淫ニ婦鴛鴦ヲ」、第四「哀情忽去歡樂忽來」、第五「名花多情却失ニ宿鴛ヲ」、第六「主尼眠ル冠蓋尼滅ル法」、第七「奇夢符合痴蝶

失い都」の七篇が收つてゐるが、第一は二日目の物語の第三話に當る話で、第二は十日目の第四話、第三は三日目の第三話、第四は五日目の第七話、第五は四日目の第十話、第六は九日目の第二話、第七は四日目の第六話を譯したものである。漢文と片假名交りの直譯體で一寸面白く書けてゐる。初篇が出たきりで二篇三篇は見當らない。次が飜案もので、これは明治十九年十月出版された小冊子「想夫戀」がそれである。これは五日目の第七話の飜案で、A Dabatier Castres のボツカツース抄 Conte de Boccace と題する佛譯本の飜案で、譯者は佐野尙氏と云ひ、補闕が菊亭靜氏、その上、高瀨眞卿、笹島吉太郎、田島象二氏等の合評を載せてゐる。佛人ビゴー氏のエッチングを挿入した和紙活字四六版の和裝本で、本文四十六枚、緒言及び奥附等で四枚、文體は在來の人情本式のものである。

次が明治二十年出版の「鴛鴦奇觀」及び「密夫之奇獄」で共にデカメロンの一話を飜案したものであつた。それから尾崎紅葉氏の飜案で、「四の緒」（明治二十八年七月出版）には五日目の第九話たる「鷹料理の話」と七日目の第九話（三ヶ條の難問）とが採られてゐる。

豎二十九年「冷熱」（八日目の第七話）は翻案、後半を概概の程度にして讀賣新聞へ連載。その後明治四十三年水野和一氏の抄譯が出たが忽ち發禁となつたらしい。

だが、デカメロンが日本へ輸入され、その全譯が初めて出版界に現れたのは大正五年以後で——（大正五年）戸川秋骨氏譯——（大正十二年）大澤貞藏氏譯——（大正十四年）筆者の譯——（昭和二年）森田草平氏譯——等）

以上四種がある。尤も昭和四年春、萬有文庫の第何卷かに和田萬吉氏譯と名乘る抄譯ともつかず全譯の半分位しかない異太本が出てゐる。確か矢口達君の監修だつたと思ふが、この書の編輯者は、恐らく前記に掲げた邦譯を組み合せてデッチあげたものらしい。誰れの原書に依つたか一切不明。水野、戸川兩氏のものは禁止、大澤氏のものは殆ど抹殺されて生かされ、僕の譯本はボッカッチョの五百五十年祭記念出版とした爲か、比較的抹殺をまぬがれたので喜んだのも束の間、あまり賣れ過ぎたと云ふので、下卷の初版六千部製本中、根こそぎ一部も殘らず押收されてギャフン、直ぐに改訂版を出したが、餘り滅茶な削除に憤慨して、その部分をそつくり雜誌變態資料の創刊號に一部分、雜誌文藝市場（世界文かめろん號）に大部分を轉載したら、これ又たち所に發禁を頂戴し、罰金まで御馳走になると云ふ不始末。だが茲で、筆者にたつた一つの自慢がある。と云ふのは、水野、戸川、大澤氏等の全譯本には、彼の原著者の有名な序文「フィリップと我鳥の話」が載つてゐない伊太利の原本通り四日目の第一話の前に、この序文たる痛快な說話を入れたのは、筆者譯のものだけ。と威張つて見た所で、それがために猥談がうまくなつたと云ふ譯でもない。

目下、デカメロンは世界各國語に翻譯され百種類以上に達してゐる。この中でも、最も貴重な珍書として世界の愛書家に知られてゐるのは左の數種で、何れも日本へ、その極々少數が輸入されてゐる筈である。

(一)チヲバンニ・ボッカッチョのデカメロン (Il Decamerone di Giobanni Boccaccio)

一七八九年、ロンドン出版、三卷もの十二ポ、青色强報なる用紙。現在二千馬克。第一卷は表題畫にボッカッチョの肖像を入れデマントナルトの彫刻。一七六八年出版。一—八頁までフィリッポ。

ダ・マ・ツテツチ・ピラニガ・フロレンスの詩人ザヨバンニ・ボツカツチヨの生活と題する銅版畫を畫く。四八九頁もの。

第二卷は、四七一頁。第三卷四五五頁、ロンドンの出版地とあれど、名義上の假地名で、事實不明。實に美麗を極めた珍本で、一字の誤植もないので特に有名である。背は金の裝飾。

(二)デカメロン (Decamerone) 新全譯ポケット版。イタリア語直接譯メーリング博士の校閲と補訂。表題枠、折込の挿畫及び背の表題はバルテル・テーマンの畫。ライプチヒのドユルーグーリン印刷所版。一九〇四年、ライプチヒのイツセル書房發行、表題は濃赤、黑の枠飾り。製本はライプチヒのケルネル。五千馬克。百部の番號附き限定版。特別製オランダ用紙の實譯本ナンバー二七號迄總羊皮以下は凡て紙製。

(三) Das Decameron des Giobanni Boccaccio.

ボツカツチヨ誕生六百年紀念出版。一折版三頁目にチエルタルドのボツカツチヨ傳、末尾に「アルベルト・ウエンセルスキイの續譯」とあり、インセル書房發行のライプチヒに於けるスパーメル版である。本版は一四九二年ベネチヤ人グレゴリイ兄弟の製作、末尾に內容目次三頁。譯にスパーメル及びインセル書房の署名入り。二千五百馬克。

等は、値段だけでも大したものだ。その他、參考までに述べて置くが、ボツカツチヨ（一三一三——一三七五年）の原書たるイタリア語の第一版は一四七一年、ヴエネチユアのヴアダルルフエルから出版された一つ折り版が其れである。英譯の全譯ものとしては、一六二〇年にアントアヌ・ル・マソン (Antoine le macon) の佛譯本を底本とした The Decameron Preserved to Posterity by Giobanni Boccaccio, and Translated into English Anno. (1620) が最初である。が、これとて完譯ではなかつた。只だイリザ朝後期の文體を示すものとして珍重されるだけ。英譯の正確な完譯が遽かに增加し出したのは十九世紀後半で John Payne, I. M. Rigg, Sharpe 氏等は最も知られた譯者で、ポピユラーを定限となつて目下輸入されつゝあるものは、リツダ氏の譯にシモンヅの序を附したルウトリヂ (Routledge) の刊行書である。戸川秋骨氏の譯書は確か該書の重譯であつたと思ふ。

とにかくボッカッチョは痛快な作家であつた。彼は云はんと欲する凡てをデカメロンに其儘吐き出してゐる。常に偽善と肉慾以外の何物もない坊主の淫行、尼さんだつて彼の前にはボロ糞だ。女房にだまされる薄野呂な亭主の話。ところで此のデカメロンに現れる姦婦の凡てが、美人で、性愛の樂みに熱心な、そして良人に對する道德心の全く持ち合せなき享樂の女だ。しかも男の要求に對して無抵抗的に其愛を容れ同時に快樂を享有しやうとする女である。女房を人に寢取られて而かも女房を讃美してゐる馬鹿な亭主。眼の前で妻の不義を見せつけられて不思議がるお人よし――と云つたノンセンスな亭主が、幾んに槍玉にあげられてゐる。全卷皮肉な喜劇の持ちきりである。說話ものとしては正に世界一の傑作揃ひであらう。

フアンニー・ヒル（少女フアンニー・ヒルの思ひ出）

原名「フアンニー・ヒルの思ひ出」（memoirs of Fanny Hill）

今から五六年前のことであつた。僕等が直接巴里から入手して其處等の珍書家に見せびらかして歩いた頃には、誰れも實物を知つてゐる者はなかつた。そして彼等の凡てが「これかい。有名なフアンニー・ヒルてこれかい！」と何れも眼を丸くして見せたものだ。勿論吾々の入手したのが日本最初の輸入であるなどとは絶對に信じない。が、その頃の所持者と云つたら極めて稀れであつたことだけは玆に斷言出來る。

そこで確か昭和二年一月であつた。雜誌の編輯に忙殺されてゐた矢先きだつたので、その翻譯を佐々木孝丸君に依賴して、各冊番號入り五百部限定の豐澤本と、フランス綴の普通本五百部を印刷して、當時僕の主宰してゐた文藝資料研究會の發行とした。結果が發禁のみに止まらず、金壹百圓也の罰金まで頂戴すると云ふ騒ぎを演じた。發行名義人は上森健一郎で、印刷は大野卓の實兄福山福太郎が引受けたのだつたが、結局僕は眞の發行者たるを明かにし氣持よく罰金を支拂つた。それが今頃になつて、やれフアンニー・ヒルは上森の出版だとか、福山の出版だなんて、お互に元氣のいゝ熱を看板に色んな綴本を賣りつ

けてゐるとのことであるが、若し其れが事實としたら、僅たるもの、あゝ何たるいゝ國の皮であらう！

四六版三四〇頁。扉オフセット二度刷。扉前に酒井雲の彩畫あり。本文附錄として十八世紀ロンドン遊里考を收む。かば色上質紙、印刷セピア。無字書葉。細布實價登譯本五圓、普通本參圓。現在拾五圓以上の古本値を呼んでゐる。

目下さかんに日本人の手に入るキュリュのかり綴安價は、この邦譯書が有名にした結果だと思ふ。

（附錄）　Memoirs of Fanny Hill (1900, Genuine Edition)

（書譜）　Memorien des Fanny Hill

その後、吾社の發禁以來、もぐりの出版屋が數回に亘つて、其僞翻刻し數千部もバラまいたので、今頃フアンニー・ヒルなんて大して珍書らしくも感じないやうになつた。尤も此の僞版には「十八世紀ロンドン遊里考」なる文獻錄の削除されてあるものが多い。

扨て此稿の終りに、該書の原作者ジョン・クレランド氏に就いて一言蹉して置きたい。

彼は一七〇七年若しくは一七〇九年生れの英吉利人である。何處に生れたかは各傳記家に依つて意見を異にしてゐるので玆には明示出來ない。が彼はスペクテーター・クラブの一員として有名なるクレランド大佐の息子であつたことは事實らしい。父の死後、財產として殘されるやうなものは何一つ持たなかつたが、ウエストミンスターの學園で立派に教育を受け、一七二二年以後、スミルナの領事に任命された事實がある。その後一七三六年印度の中隊に編入されてボンベイに駐劄したが、間もなく道樂が祟つて免官され、英國へ歸つて來た。そこで失業後の彼は、酒場から酒場へと渡り歩き、淫賣婦と遊蕩兒の世界に其日を送つて、この社會のどん底生活に浸り出したのだ。

彼の初めて此の傑作をものしたのは一七四〇年でフアンニー・ヒルと云ふ假名の一少女を借り來つて、十八世紀倫敦の賣女生活の暗黑面を縱橫無盡に描破したもので、發端はフランスの片田舍リヴアブール在の小村ランカシヤイアに於て兩親に死別した少女フアンニ

ー・ヒルが倫敦に流れ渡つて魔窟專門の女街に誘拐され、或る貪慾な金持の隱居に最初のバーチンを破られやうとする。未だ性を知らない純心な魂は極度の恐怖に戰慄する。併し魔窟の女將は頗る心得たもので彼等仲間の常套手段に訴へて、苦もなく彼女が永遠の誇りを一氣に征服せしめやうとする。そこで女將は姐さん株のばいたに命じて、彼女に最初の性的豫備知識を授けしめる。この場面が頗る肉感的描寫に富んでゐる。

切詰めて云へば一少女が一人前の賣女となるまでの深刻な肉感的過程を自叙傳風に書きこなした作品である。

ジョン・クレランドはこの「ファンニー・ヒルの思ひ出」の他に、なほ興味ある數種の小說を書いてゐる。「或る蕩兒の思ひ出」——（一八五七年）。これはファンニー・ヒルに相對すべき蕩兒の自叙。「戀の驚き」「高德の人」以外に二篇のドラマも殘してゐる。卽ち紀元一世紀頃のローマ帝を書いた「ティトウス・ヴェスパシアン」に、「アメリカ土人」と云ふ性喜劇である。併し何と云つても彼の傑作は「ファンニー・ヒルの思ひ出」で、英國のマノン・レスコーとも云ふべきしろものだと思ふ。

ジアルダン・バラヒユーメ（匂へる園）

シイク・ネフザウイの名著「匂へる園」は、アラビアの奇書と云ふより、寧ろ世界一の珍書だと云つた方が解りが早いほど有名な古典で、印度のカーマ・スートラに對比さるべき東洋が生んだ最大の性典であらう。

本書は一八五〇年に十六世紀のアラビア語の寫本より飜譯されたのが現存の原本とされ、その譯本は一八七六年に粗末な石版刷で三十五部印刷され、各冊番號入りの四ツ折本で、背線畫二枚の他に、十三枚の石版刷挿畫と、四十三枚の素描畫とが青帶色の紙に印刷された。所が一八八六年となるや、一部六百法の高價を呼び、日本紙に印刷した贅澤版の方が千二百法と云ふ法外な値で賣買されるに至つた。

僕が初めて本書に接したのは、一九〇四年巴里で出版された三二〇部限定印刷の一部で

あつて、その後、更に僕は一八八六年イジドオル・リズウの私的出版の一部迄入手するを得、益々「匂へる園」の耽讀熱にうかされ出したのである。

著者ネフザウイはアラビヤの一酋長に過ぎないが、その文學に、傳記考證に、或は醫學上の知識に、これほど詳細な研究を合せもつ學者はアラビア人中到底他に見出されない。本書は六世紀の初期、回教紀元九二五年頃の著述と見るのが最も正しい。著者ネフザウイの酋長はナユニス國の南部、セブカ・メルリルの湖畔ネフザウイア地方に生れたらしい。

本書中モカイラマやシエジヤに關する記錄は悉くマホメツド・ベン・ジエリイル及びタベリ等の著作よりの拔萃であり、男女秘事姿態の種々相を初め、秘具秘藥の項は印度のカーマ・スートラその他數書よりの借りものと思へる項が多い。併し一ツ一ツの秘事を說明するために引用された說話は吾々にデカメロン以上の興味をもたせる。

著者自身の序に依れば、本書は生殖の秘義を說いた「宇宙の火焰」と題する一小著にヒントを得たとのことである。

而かも該書は、チユニスの君主アブド・エル・アジズに依つて一層輝され價値づけられた所が多い。君主には一人の最もより良き友人であり秘書官であり詩人でもあつたモハメツド・ベン・ウアナ・エヅヅアウイと云ふ同伴者がゐた。そこでチユニスの君主は當然彼を其國の總理大臣に任命してゐた譯である。この大臣が本書を手に入れたので、早速使を遣して彼を招き寄せた。そこで吾がネフザウイの酋長は喜び勇んで彼の邸を叩いたと云ふ譯それから三日目に大臣自身が彼の住ひを訪れた。そして大臣は彼を斯く輝した。

「何も恥しがることはない。君の著作は悉く眞實だ。その上、君のみが斯う云ふ題材をものした最初の人だと云ふ譯でもあるまい。僕は神に誓つて云ふ。本書の敎へは眞に必要缺く可からざる事柄のみだ。」云々。

そして更に、大臣は「此著作に是非秘藥を附加する必要がある。又、秘事的慾望を促進させる動機に就いて、或は其れに伴ふ障碍に就いて、更に包莖治療法、性器增大法等にまで立到つて說く必要がある。又、女の腟窩、內部の惡臭を取除く方法も必要だらうし、其

他、子宮緊縮、姙娠秘事に關する數々な疑問も說いて欲しい。」云々。

そこで彼はアラーの神に誓つて答へた。「貴方の御希望通りの著述を附加することなどは大して至難な研究に屬しませぬ」と。

彼は早速本書の作製に熱中した。そして、「魂の慰安の爲めの匂へる園」（Er Rond el-ester fi negaha el khater）と名をつけるに至つた。內容は第二十章に區別されてゐる。

實は一昨年の春以來、完全なる原書を所持してゐたので、此の全譯を僕と酒井潔の共譯で出版して見たいと心掛けてゐたのだつたが、矢張に難解なアラビヤの古文字が出て來るので、非常な骨折りをしたものだ。が僅か六字か七字のどうしても譯のつけやうのない文字にぶつかつて二人とも氣を腐らして一時その儘にして置いた。併し會員諸君等には、「愛に關する世界的珍書」第三卷として既に發表濟みにしたし——と云つた癪應閑々の折りに突然、上森健一郎の所から「黃園秘話」と題して、五圓の會費にしては粗末過ぎる安本を出したので、驚き恐れ入つて、吾々の仕事を其儘に葬ることにして了つた。誰れの手に出

版されやうと本書だけは登澤版にした完譯が欲しかつた。若し上森にして今少し珍書通たらば、斯くの如き粗製品は氣がさして出せなかつたであらうが、何にしても惜しいことをしたものだ。上森の勇敢は大いに推賞していゝが、愚痴を云へば譯者を嚴選して貰ひたかつた。アラビヤ文字の肝腎な文獻が悉くオミツトされ、その上、この方面の隱語秘語に通じてゐなかつたせいもあらうが誤譯抄略だらけで折角の中味を滅茶苦茶にしてゐる。先日鎌倉行きの車中で上森と會した節も此一言を繰返して置いたことだが、早稻田の一學生には荷の重すぎる飜譯だと思ふ。尤も原書をキユリユの安本に據つたからかも知れないが、だが大體あれでも匂へる園の輪かくは知り得られる譯だから、此點大いに感謝して置く。その譯書の目次を左に拾つて見やう。

原著者序文

第一章　稱讚に値する男子に就いて

(1)　詩人の歌

(2) 女が男に求める諸性質
(3) の長さの種々相
(4) 性交に於ける香料の効用——モカイラマの物語
第二章 稱讃に値する女に就いて
(1) の黒髪ドレラーム話
第三章 輕侮される男子に就いて
第四章 輕侮される女子に就いて
第五章 生殖行爲に就いて
第六章 於ける快適なる凡ての方法に就いて
(1) に於ける種々の樣式
第七章 生殖行爲に於ける害毒に就いて
第八章 男子性器の名稱に就いて

第九章 女子性器の名稱に就いて
第十章 動物の性器に就いて
第十一章 女の詭計及び密通に就いて
(1) 鍼をつゝいて蛇を出した話
(2) 氣のすゝまない情夫の話
(3) 驢馬に姦通された夫の話
(4) 愛を盜む話
(5) 二人の夫を持つ女の話
(6) パヒアの話
(7) 女の策略に精通してゐながら一杯食はされた男の話
(8) 不意に夫に踏み込まれた姦夫の話
(9) 無益な用心の話
第十二章 男子及び女子にとつて重要な諸問題に就いて

第十三章　生殖行爲に於ける享樂の原因に就いて
第十四章　不姙症の女子の子宮狀態と其治療法
第十五章　男子の　不能に就いて
第十六章　包莖の治療法
第十七章　短小なる　する方法に就いて
第十八章　女子の腋臭及び　惡臭を除き、これを挾窄する方法に就いて
第十九章　女子の懷姙と懷姙せる女子の分娩せるもの、卽ち胎兒の性に就いての知識
第二十章　此の著作の結論と　有効なる鷄卵攝取の効用に就いての注意
(1)　ソオヲの話
石版刷本の跋文（讀者への言葉）
以上。

目下、日本にゐても、佛のキュリュ社やアルチステック社發行の(Le Jardin Parfume)

等がある。

ラテイラ・ハスヤ（性愛秘藏）

カーマ・スートラの姉妹篇とも云ふべき古代印度に於ける性典の一つである。

僕がはぢめて本書の存在を知つたのは、シュミットの「印度に於ける性愛文獻考」(Beiträge Zur Indischen Erotik, Berlin 1910) である。その中には、カーマ・スートラ、カーマ・シヤストラ、アナンガ・ランガ、ラテイラ・ハスヤ等の印度が生んだ性典を一々克明に紹介してゐる。シュミットは此書に於て、ラテイラ・ハスヤを寫本から引用したと見え、全篇十章に分類してゐるが、大正十五年の十月、印度學會の泉芳璟氏の全譯した梵語直接譯ラテイラ・ハスヤに依ると全篇十五章に分類されてゐる。之は一九一〇年ベナレスのタ

ーラ印刷所に於てデーヴイーダツタパラージュリーがカーンチーナートハの註釋と共に出版した活字本の直接譯だと云ふことである。

本書は古代印度に於ける性典カーマ・スートラより稍々後れて出現したもので、大體がカーマ・スートラを整理統一し、それに同書未見の項目を加へたものと思へば大差あるまい。例へば、卷頭の婦女篇に、蓮花性、雜色性、螺貝性、象性の四種の如き、又最後の二章に奏法を詳述した如きは何れもカーマ・スートラにも未見の研究である。一般に前書の奥義篇に比して加筆增補し量に於ても數倍に達してゐるのが嬉しい。

本書の作者コーツコーカが本書の著述に從事した動機に就いて、佛譯のアナンガ・ランガの卷頭に次の如き一奇話が掲げられてゐる。

曾て一人の婦人がゐた。彼女は　に惱みあぐんでゐたが、誰れも彼女に滿足を與へやうと欲するものがなかつた。そこで彼女は煩悶の末、自分の身につけてゐた着物を脱ぎ棄てゝ裸體となり、自分に　へ與れる男子に出くわさゞる限り、何時迄も裸體の横行を續けて見せると聲明した。そして彼女は裸の儘、王宮の謁見室に悍る處もなく闖入したので、廷臣達は周章狼狽して、女の醜態を極度に責めた。併し彼女は平然たるもので

この室中に只の一人の男子もゐない。婦人達の中にゐて婦人の一人が裸になつたとて何が羞恥であるかと傲語した。王を始め、廷臣達は呆れ果て暫し返す言葉もなかつた。この時王の側坐にゐた聖者コーカは掌を合せて王に奏し、この淫蕩飽くなき　ることの聽許を請ふのであつた。王は其れを許した。で聖者コーカは女を吾が家に伴ひ歸り、秘術を用ひて此れを征服し、始めて女に　を與へたと云ふことである。

に氣絶して了つた。そこで彼は其女の足と腕とに黄金の針を貫いて、再び王の面前に出て女に敗北の告白をさせ、始めて女に衣服を着せた。王は此れには非常に驚き、如何にして勝利を得られたか、その方法を說明せよと迫つた。そこで聖者コーカは王の面前に於て性愛の秘義を說き、秘事に關する凡ゆる知識を傳へたと云ふことである。

それが卽ち玆に云ふラティラ・ハスヤだと云ふのである。目下印度に於ては廣く流布され、各地の方言にまで釋譯されてゐるが、日本では大正十五年九月下旬に泉芳璟氏の飜譯發行した五百部あるのみである。尤も、その後、東京の某書肆が此れを其儘五百部を復製

して秘密裡に大々的な廣告をしたとかで、泉氏の機嫌を損じ絶交したとかしないとかゴタ〳〵してゐるらしい。これが普通公刊され得る書籍なら、著作權侵害で公の喧嘩も出來やうが、何しろ物が物だけに痛し痒しで手が出ないのだと專らの噂である。

本書の目次は次の如きものだ。

第一章　種姓篇　詩數二十三）——序言——婦女の四種類、蓮華性、雜色性、螺貝性、象性、——四種類の婦女に對する　日時とその樣態——婦女を　咒文藥物

第二章　（詩數十七）——婦女のオルガズムを催起すべき方法——一定の日時——身體の部位

第三章　性交種類篇　（詩數三十七）——生殖器の大小による分類——兎族、牡牛族、牡馬族、牝鳴族、牝馬族、牝象族、時の長短、勢の强弱等、

第四章　總說篇　（詩數二十九）——年齡による婦女の分類、幼齡、壯齡、熟齡、老齡——强質、弱質——各齡の婦女に對する態度——粘液質。風質、天族、人族、藥叉族、乾闥婆族、畢舍遮族、鳩族等——婦女に破滅の原因——オルガズムスの標識、時機

第五章　方處智識篇　（詩數二十六）——快感（これは前章の續き）——中部地方——アビーラ地方等多くの地方の習俗に就て記述す。

第六章　抱擁篇　（詩數十二）——接觸抱擁——貫通抱擁——壓迫抱擁——蔓抱擁——乳水抱擁——腿處抱擁——頸部抱擁

第七章　接吻篇　（詩數九）——顫動接吻——打衝接吻——屈曲接吻——灌囲接吻——上脣接吻——驚嚇接吻——影像接吻——移動接吻

第八章　爪搔篇　（詩數六）——爪の性質——觸傷——半月輪——二月輪——孔雀の足痕——兎の眼瞼——舞蹈

第九章　齒咬篇　（詩數四）——祕密——腫脹——瑠璃珠——粒滴——珠玉——粒滴蔓——雷雲——野猪咬

第十章　（詩數六十六）——性交準備——ヨーニの樣態——正交——傍交——坐交——

立交——背交——村邑戀——都城戀——閑敷華式——顚呻式——帝釋妃式——壓迫戀——置蔡式——牝馬型——狗像式——駒型舞——牛身壓迫式——呻展式——破竹式——集鈴式——甲型式——歡樂式——蹲座式——牛蹲座式——蛇索式——拘束式——龜式——飼馴性交——包鬼式——蜂反式——愛脚式——勝碎式——猿猴式——特殊性交——膝臂式——神力舞——二面式——懸垂式——偕伏式——牝牛式——象式——並接——隣接——並寝——快楽——不快感——男用具——回轉式——性交態——打擊

第十一章　少女親近篇（詩數二十二）——如何なる少女が適當なりや——少女との　に關する注意

第十二章　妻女篇（詩數十二）——妻の義務

第十三章　他妻篇（詩數百〇四）——愛着——他妻にして得べきもの——得難きもの——方法——婦女にとりて得らるべき男子——努力なくして得らるべき婦女——情事——からざる場合——使者等

第十四章　勢力增大篇（詩數五十三）——婦女の　——ヨーニの缺點除去法——緊縮法——擴大法——毛髮除去法——孕胎法——安產法——ヨーニの苦痛と惡臭の除去法——體臭除去法等

第十五章　總說技術篇（詩數百二十九）——刺戟法——避妊法——

以上

僕の知る範圍では左の四種である。

佛譯（Ratirahasya, Secret de l'amour）

獨譯（Beiträge zur Indischen Erotik）

邦譯（ラティラ・ハスヤ——性愛秘義）

雜誌（菊版）　式假綴、本文普通印刷紙一一六頁。索引二一頁。大正十五年九月下旬。京都。印度文學研究會發行。泉芳璟師譯。

梵語原本

四六版、本文二二八頁、詩語冒頭索引一〇頁、要項索引二頁、目次五頁、一九一〇年ペナレスのターラ印刷所版。カーンチーナートハの註釋附。デーヴイーダツタバラージユリー發行。

佛譯及び獨譯は、注文すれば何時でも入手可能だと思ふ。

エル・クターブ（典籍）

エル・クターブ、土耳古讀みに發音すると、エル・キターブ（El Kitab）と云ふ。このエル・クターブと云ふ題名は單に典籍と云ふ意味で、それが書名ではない。土耳古スタンブールの教授オーメル・ハルビー・アビー・オスマンの著述で、一言に盡せばコーラン（マホメツトの教典）を如實に解釋した土耳古の性愛教典だと云へばよからう。一八六五年頃コンスタンチノーブル地方一帶に襲つたコレラのために淵となつたオーメル・ハルビーが病床にあつて看護に努めた一人の弟子に口述筆記せしめ、その表紙に「エル・クターブ」と書かせた一束の大部な草稿が實に本書なのである。

現在、世界に流布されてゐる佛譯本はドクトル・ポール・ド・レグラ氏の校訂になるものだ。不幸にして僕は土耳古の原本に接したことがない。尤も此の原本は今から百年前に僅か七十五部しか印刷頒布されないと云ふ歴史をもつてゐるので、多少あきらめもつくが、今僕の所有してゐる佛譯本は

ELKTAB des Lois de l'amour. Dáprea Omer Haleby. Traduction, mise en ordre et commentaires p. Paul de Regla Lex. 8° 288 page. paris.

元始篇、歴史篇、魔術篇の三部に區劃され、全篇十七章、各項中校訂者、レグラ氏の評釋並に附錄まで添へられてゐるためか、比較的苦心せずに讀める。昨年一月吾々の鞭韃に依つて上海のエロテツク・ビビリオン・ソサイティより五〇〇部の限定出版で、その第一篇たる元始篇の邦譯を出した。各冊番號入の菊半裁假綴贅澤版。本文紙獨逸製シルク・コーデリア。オーナメント入りオフセツト二度刷、八五頁。表紙、見返し純日本製局紙、無字四葉。——でこの第一篇の目次は次の如きものである。

コホヂヤ（教授）の死

第一冊　元始篇

第一章　男女兩性の創造

告示＝新聞――男子の本質――兩性具有時代――その分離と受動及他動的本質――女子の創造――アダムとエヴア――彼等の職任――性交に依る結合復歸――その行爲發生の高妙と神聖――萬物の根元――古代の男性神

第二章　自然の結合

告示＝性交の長所――その本質と目的――その實行と最良の方法――　に於ける香料の利用と禮拜――性交を禁止すべき人々――猶太教と加持力教とに對比せる回教經典の教義

第三章　性交の合理的種々相

告示＝處女と薔薇花と太陽――處女と行動の手段――猛烈粗暴なる性交より生ずる心配――不姙症と其療法としての四種の性交法――邪視と呪詛に基づく不姙症――イスラムの法律に依つて許されたる種々の姿勢

第四章　一、　と不正の方法

告示＝邪惡の天使と精靈とその誘惑　有害ならざるも健康上不可なる性交法――精液の曲用――偶像崇拜者並に基督教徒間に行はるゝ一般的及び口唇を以てするオナニー――其れに對する回教經典の定説

第五章　邪淫の種々相

告示＝神のなさしむる行爲か否かを疑ふ――男子の宦官との姦淫――その自由に行はれた事實――その法律的禁制――獸類との姦淫――獸姦――醫療として獸類犯姦と法律家――牝騾馬其他の獸を犯して淋疾の平癒せし實例……回教典の教義

第二冊、第三冊は引續いて上海より出版される筈であるが、未だ確かな通知に接してゐない。

フロッシー（十五歳のヴエナス）

本書の原本は英國ものである。併し、英國の珍書蒐集家ですら、この原本に接した人は殆んどないとのことである。原本と云つても寫本で五十部しか作製されなかつたものである。それを秘畫入りの活字本にしたのは獨逸で、本文も英語から獨譯されてある。僕の初めて入手したのは昨年の秋で、勿論獨逸から古本で得たものだ。書名は「フロッシー」一名（十五歳のヴェナス）とある。原著者は、次の如き長い名の匿名を用ひてゐる。

——人の心を溶かすやうな魅力ある女神を知り且つ其祭壇に身を捧げる或る男——即ち

(Flossie die fünfzehnjährige Venus von Einen, der die entzudrende Göttin gek nnt und an ihrem Alter geopfert hat)

この獨譯本は、一九〇八年四月に只一度切の出版として、一々機械に番號を附して四百部印刷されたものだ。無論これは豫約者にのみ頒布されたもので、「專ら、學術的興味のある讀書界のために印刷に附され、一般には絶對に賣られる性質のものではない。最初の十部は本當の手漉きの紙に刷つて、羊皮紙の表をつけてある。」と冒頭に斷り書がしてある。

更に、獨譯者の序文を見ると、暗に原著者は詩人スウインバーンであるものゝ如くほのめかしてゐる。即ち「公衆の面前に現はれる此の小冊子の著者はA・C・スウインバーン氏に優るとも決して劣らざる人なので御座います。此の英國詩壇の元老を知る程の人、彼を愛好する程の紳士淑女は皆口を揃へて云ひます——この未だ着物の肩上げも取れないヴェナス「フロッシー」こそは、彼れ詩人の情火。彼の詩人的パッションの娘だ——と。

が當の彼れスウィンバーンは今日では既にバイブルの齢を遥かに超えてゐます。そしてうら淋しい微笑を浮かべて、彼が「フロッシー」を物した或る黄金の日曜日のことを回想してゐるので御座いませう。或る戀人、そうです。フロッシーのやうな、あんなスミレ色の服をもつた戀人のために、恐らく彼は此れを書いたでせう。（以下略）——おそらく、いとしい女子を求愛するために、又おそらく永久に消え去りしものに對する追憶を、再び呼びさまして、

まうために——。それを肉慾的パッションの詩とこそ申すのであります。然し、悲しいかな、それは實に屢々而かも好んで猥褻文學と同一視

されるので御座います。痴鈍な、えせ君子どもや、うそつきなタルチュッフ輩は蓑も味噌も一つにして了ふので困つて了ひます。

そう云ふ人間達は、「フロッシー」のやうな著作の中にある眞の詩、眞の心地よき優しさを認める輩ではありません。彼等の、ぶつきら棒な太い指に觸れられては、精巧な、あのベール――それは詩人が最も肉慾的な出來事を包んで置くベールは、滅茶々々に破れて了ひます。彼等には、たゞ赤線だけ……えゝ赤線だけが問題なのです。赤線を引いて、こつそりと獨りで悦に入るやうな箇所だけしか殘さないからです。

勿論この一人の若い乙女の物語「フロッシー」は決して娘さんたちのために書いたものでは御座いません。これを書いた詩人は、その時代には、ほんとうに、こつそりと印刷せねばなりませんでした。而かもたゞ、彼の小さなグループのためにのみ。しかし手から手へと此の小さな本は渡つて行きました。これを讀んだものは誰れしも、もう一度もう一度と、それを又手に取らないものはありませんでした。そして誰れしも此の本の中から詩人スウインバーンの面影の現はれるのを意識し、その溶ろけるやうな幸福さに人知れず微笑をもつて迎へたのです。何卒ぞ本文を御覽下さい。あの火を噴くやうな言葉。それでゐてしかも優雅な此等の言葉は、彼ならでは發し得ない――と云ふことを。

一人の詩人が名を秘して著さないやうな場合に、それを見分けるためには、ただ詩人の言葉を解するのみでは物足りません。何物にも增して「感ずる」と云ふことが一番肝要なので御座います。（以下略）――

この序文にヒントを得たので、僕は本文の凡てに微細な觀察を忘らなかつた。所が果して本書は、最も用意周到な注意のもとに、匿名で書かれた詩人スウインバーンの秘作であることを發見した。

獨譯本は、四六版一三六頁、獨譯者序文二頁、原著者序文二頁、背皮表裝頓、手刷り秘畫六枚入りの貧弱極る私的出版で、而かも二十八圓と云ふベラ棒な高値で買ひ取つたものだが、昨年四月、吾社に於て、此の獨譯文の誤謬を訂正し、それに日本譯をも添え、本文

印刷オフセット四色刷、コロタイプ中扉六葉、扉は獨日語とも日本製最上局紙三度刷り、秘畫六葉コロタイプ手刷り、半皮麻ダック裝幀と云ふ贅澤本を四百部の限定版にして頒布し、罰金を頂戴した。と云ふ苦々しい經驗をもつてゐる。頒布會費を五圓としたのだつたが、實際に七圓弱を要し、一冊一圓八拾錢ほどの損で道樂慾が充たされた譯だが、罰金だけは馬鹿々々しかつた。併し日本譯だけは文章こそ自信なけれど完譯した筈。念のために獨語を添へ、獨逸語研究者に對讀させ――まあ一種のリーダーとして出したわけ。目下、某官立大學の獨文科では、これが引つ張り風で、教授にも學生間にも大變な人氣を呼んでゐるとのことだが、先日某大學生の僕宛によこした手紙の一節に曰く「古いところでゲーテ、シルレル、近代になつてハウプトマン、ウエデキンドなどの作品に觸れ乍ら語學を修めるなんて時代錯誤だと思ひます。ウエデキンドの「春のめざめ」は多少エロチツシュなものだけに語學をやる上に比較的効果があると思ひましたが、今度、はからずも友人から借り受けた「フロツシー」＝なんて素的な物語だらう。隱語秘語に富み、普通の辭書にな

い字がザラに使つてありますが、懇切丁寧なる譯文がついてゐるので非常に愉快に拜讀出來ました。語學を修める上に於て最上の參考書だらうと思ひます。今頃、道學者流の安價な修養書をもち來つて語學の教科書にするなんて、全く地獄です。」云々

これには驚いた。內務省や裁判所で叱られた本が、學生教授間に於て語學の參考書にされてゐるとは氣がつかなかつた。善良なる風俗を害するとは蓋し此の事を云ふのか？

扨て本書の梗概と云つても、詳細に亘ることは遠慮せねばならないが、一人の勇敢な英國の青年士官が、嘗つて、妹の家庭教師であつた美しい一女性に、或る日偶然にも何で出逢つた。その時、彼女は今年十五歳になつたばかりのコケツトな娘を伴つてゐた。青年士官の戀は此刹那より燃え、又、その少女フロツシーも彼を憎からず想ひ染めた。そこで彼等兩名の中に、その家庭教師だつたエヴアと云ふ女性が仲介者となり兩人の戀を結んでやつた。が、彼等の情熱が昂ずるに從つて益々極端な領域にまで進展して行つたので、流石の仲介者エヴアも此の雰圍氣に捲き込まれて、自らも其渦中の一人となつて樣々の

取り出すプロセスを極めて情熱的に運ばせてゐる。作の全體を通して浮ぶ感想は、女性間のみが演ずるオナニズムの徹底したものでカンニリングスの一文獻として存在價値を殘すものだと考へられる。

目次を見ると第六章に分けられてゐる。

（第一章）若い子供だけが私の愛するものだ。
（第二章）フロッシーは如何にして佛語を學んだか。
（第三章）甘き夜
（第四章）フロッシーの學校生活の續き其他
（第五章）誕生日の祝宴
（第六章）幸福の所有者

以上。

アナンガ・ランガ（愛の舞踊、或は愛の海を渡る船）

アナンガ・ランガはカーマ・スートラ、ラティラ・ハスヤと共に印度の三大性典の一である紀元十五六世紀の著作で、三大性典中最も後代に屬するものである。Kalyana Malla が Gujerate の副王 Ahma-Khan の息ラウアカーン（Lava-Khan）の性教育の爲に書いたもので、カーマ・スートラ及びラティラ・ハスヤ等の要約書である。（先日、牛込の文藝資料研究會から發刊された竹内道之助氏の譯書には、ラーダ・カーン（Lada Khan）のために書かれたとなつてゐるが、佛のリーズ本に依るとラーウア・カーン即ちラーウア酋長となつてゐる。（何れが是か？）本書をアラビツク、ヒンドスタニ、マズルマンの間では婦人の快樂（Lizzat al-Zin）と呼ばれ、ペルシア、トルコでは夫々その題名に多少の異つた名稱を附してゐる。印度の三大性典中興味の點から云へば一番面白いと思ふ。序だから云つとくが印度には此の三性典の他に

(1) チョヂリーチヤの Pancha-ka-kya（五個の矢）
(2) グチヤパーチの息、グナカーラの Amara-Pradipa（戀の燈）
(3) 詩人ジヤカデヴの Ratimar-Jari（戀の花飾）
(4) 詩人バーヌダツタの Rosman-Jari（戀の芽）

等の好色的文献書がある。

扨て、このアナンガ・ランガに就いてであるが、これは前記カーマ・スートラ、ラテイラ・ハスヤに比較して、その秘藥篇に共の奥義篇に二者より一層システイマテツクに富んでゐる。奥義篇を列擧して見ても、

先づ婦人の　（させる處方が七種、男子の　かせる處方が八種。元氣付け滿足する力を與へる藥が八種。　強大にする法六種。　縮小さす處方七種。

住香を與へる藥二種。脫毛方三種。月經閉止療法二種。月經整調法三種。姙娠法六種。同じく三種。分娩を容易にする法四種。產兒制限法四種。コスメチツク四種。染髮法

（黑色に）四種。肌の清潔法三種。顏色の黑きを直す法二種。乳を堅く大きくする法二種。ブラ〳〵の乳を引き上げ堅くする法三種。惚れ藥。汗臭きを治す法六種。香油九種。口臭治療法。五種。以上

御覽の通り、至れり盡せりである。

カーマ・スートラの奥義篇は、錬金術師の無限の夢を萬華鏡で覗く樣なもので實感を超越した空想的詩境である。此の方は一寸試みて見やうかなどゝ云ふ野心は起きさうもないが、アナンガ・ランガの秘藥方は、何んだか出來る樣にも思はれ好奇心が頭を擡げる。

脫毛劑の處方。三種。

一、粉末の酸化鐵を苦味性の油に混じ、七日間天日に曝し用ゆ。

二、硫黃を交ぜし石灰を、バナナの汁の中に入れ七日間天日に當て、少量の石黃に混じヨ　ニの毛に適用す。

三、バナナの汁に粉末の雄黃とバラスカの灰を加へ用ふ。

脇下及陰阜等の脱毛が古代東洋人に重大な日課であつた事は疑なき事實である。それは單に清潔感のみならず男子の性慾を昂奮させる裝身術の一であつた事も疑へない。かのビエール・ルイスの代表作「アフロディット」の中で娼婦クリシスが朝の化粧をする時ヨニの毛を奴隷女に剃らせる素晴しい描寫があるが、ルイスの筆力に依るとはいへ其の狀況を想像する時誰でもが一種の快よきパツションを感ぜずには居られまい。

其の他諸處方も右脱毛劑に於けるが如く甚だ簡潔に出來てゐる。然し筆者がアナンガ・ランガの秘藝法を多少實行味があると云つたのはカーマ・スートラに比較して云つたのである。現今の吾々から、考へて見たら、もとより眉唾物なのは勿論である。江戸期の精細な秘藝法にすら信用の置けぬ以上、古代印度、アラビア、トルコ等のそれを實行出來る出來ぬと目角を立てるは野暮の沙汰であらう。

アナンガ・ランガの諸章中一番興味ある所は第十章 Des jouissances internes et de leurs differentes formes である。つまりカーマ・ストラの第二品性交篇中の第六章

び其の變態」に該當してゐる。カーマ・スートラに於ては六十四と云ふ數が重大な意味を持つ樣に、アナンガ・ランガに於ては三十二と云ふ數が重要視されてゐる。此の數は姿態が三十二通りある事を暗示してゐるのである。

を大別して五ツとする。

1 Uttana-fumiha
2 Tiryak
3 Upavesha
4 Utthita
5 Vyanta-bandha

で、(1)が十一變化、(2)が三變化、(3)が十變化、(4)が三變化、(5)が二變化であるが、猶三變化を加へて三十二通りの說がしてある。

それは扨て置き、本書の英譯及び佛譯が日本に輸入されたのは、今から七八年前で、恐

らく日本では僕と酒井潔とが一冊づゝ手に入れたのが最初でないかと思つてゐる。英譯の出たのは一八八五年、卽ち今から四十四年前である。この初版は僅かに六部しか印刷されなかつた。が翌年三十五部再版された。その三十五部中の二部まで吾々の手に入つたのだから吾々唯一の自慢木で昨年秋まで珍藏してゐたが例の上海事件で長崎稅關に沒收されて了つた。表題は確か、Ananga-Ranga=Stage of the Footless one=or The Hindu Art of love. (ars amoris indica ラチン語) =Translated from The Sanskrit, and annotated by A. F. F. and B. F. R. Reprint: Cosmopoli 1885, for the Kama Shastra Society of London and Benares, and for private circulation only.

これにもある如く、ロンドン及びベナレスのカーマ・シヤストラ・ソサイテイの限定出版である。リズーの佛譯本の出たのは、一八八六年で、これは英譯本三十五部の一部から佛譯にした重譯ものである。

Ananga-Ranga, traite hindou de l'amour conjugal rédigé en sanscrit par l'archipoète

Kalyana Malla (Xvle siècle) traduit sur la premièr version anglaise (cosmopoli 1885) par Isidore Liseux. Paris 1886)

ところが一昨年あたりから、さかんに日本へ輸入される佛譯のキユリユ本が出てゐる。Le livre d'amour de l'orient partie Ananga-Ranga, Traité Hindou d'Amour conjugal La Fleur lascive orientale-Le live de Volupté (Introduction et notes par B. De Villeneuve, Paris Bibliothèque des Curieux, 4 Rue de Furs embeg, MCMXXE)

扨て、此の邦譯に就いて、泉芳璟氏及び竹內道之助氏は共に「本書は未だ嘗つて邦譯を試みたものはないなんて斷言されてゐるが、一昨年のこと既に吾が酒井潔が詳細に亙りて紹介し盡してゐる。(文藝市場一九二七年七月號參照)、日本に於ける草分けをしたのが酒井潔で、今頃アナンガランガでもあるまいと思ふ。

先日、文藝資料研究會から出た竹內道之助氏の譯本は、納本一ケ月以上も前に配本されたので、豫約者には洩れなく配本濟みのことゝ思ふが、(發禁になつたか、關金ものかは僕の

如き疑問でない）同書に於いて一言質問を許して貰ひたい。

一昨年の夏、吾々は「愛に關する世界的珍書」として十六冊の書名を擧げ、これを片ツ端から編譯限定頒布する旨の廣告を出したことがある。その中の一冊が此のアナンガ・ランガで原本は前記、一八八五年版の三十五部しか印刷されなかつた英譯の初版本より翻譯する豫定であつた所が間もなく上海よりの歸途、長崎稅關問題が勃發して此の珍本が沒收されて了つた。それで一同が佛譯のリズー本か佛譯の B. De Villeneuve 氏の解說に爲るキュリュ社の本に依るか、それとも巴里アストラ社發行の英譯本に依るか、何れにしても此の三種を各引用すれば比較的完全なものが出來るだらうとの話まで出たが、どうも梵文で讀めない吾々にとつては、最も完全に近い三十五部印刷の英譯本に依るより方法がないと珍書家道德を重んじ、幸ひ其の所有者がフランスにゐる事を發見したので實はコツピーを依賴中であつた。そこへ今度の竹內本が突然出現したと云ふ驚ぎなのである。竹內氏は其の譯書に就いて F. F. Arbuthnot & R. F. Burton 氏の梵語原典よりの直接英譯を重譯したものであると明言してゐるが、若し氏にして此の六部しか頒布されなかつたと云ふリチアード・バートン氏のものを、直接邦譯したものであるとすれば、それこそ大した珍物である。筆者不幸にして、一八八五年のバートン六部版は未見の珍書である。四十四年前に世界に散らされた僅か六部の珍本の其一部を所持されると云ふ竹內氏に、是非拜見させて戴きたいと思つてゐる。同氏の譯本は、縱令と原文を對照して見ると、確かに、巴里の安本屋アストラ社の英譯本に依つたものとしか見えない。念のため同書の題名及び發行所を左に明記して置かう。普通の菊版假綴本である。

The Hindu Art of Love or Ananga-Tanga, translated from the Sanskrit of Kalyana Malla and annotated by A. F. & B. F. R. (Libraire "Astra" 12, Rue de chabrol, Paris Xe)

勿論この英譯本に依れば、リチヤード・エフ・バートンとあれど、これなら最初から出鱈目なイカモノだと云ひ得られる。此點大いに明かにして欲しいものである。

尙ほアナンガ・ランガの日本に紹介された文献には、最近では、河井潔の「愛の魔術」中、秘薬篇に於てリズーとアストラ本を參照したアナンガ・ランガの引用が大分見受けられる。

竹内氏本を見ると、第一章より第十章にかけて次の如く譯出されてある。

緒言
第一章　婦女の四種類に就いて
第二章　婦女に於ける情慾の種々なる所在に就いて
第三章　男子及び婦女の種々なる種類に就いて
第四章　婦女の一般的品性、特徴、氣質及び其他の記述
第五章　國々に於ける婦女の特徴
第六章　有効なる藥品その他に就いて
第七章　ヴアシーカラナの施法
第八章　男子及び婦女に於ける種々なる標識に就いて
第九章　〃　の施法
第十章　〃　〃　種々態の施法
附錄一　結婚に關する占星學
附錄二　〃

以上。この稿は此程度に止めて置きたい。

ツルー・ラブ　と　ベラ・アモ　（愛の眞相）

明治大正を通じて吾國に輸入された艶本中、これほど人々の手から手へ流布された本は一寸他にあるまいと思ふ。日本へ輸入された最初は明治三十七八年の日露戰爭當時で、原書は菊半截ラシヤ紙表紙假綴本文二二四頁と云ふ粗末な英語本で、北米合衆國の出版となつてゐるが、その實、上海でさかんに亂製された粗惡本なのである。最初の邦譯が出たの